



# 心の歌を奏でて

---

—四護邂逅— ①

---

芳田尚哉

---

修練を続けてさらに三日。ついにその力を試す時がやってきた。

「雛罌粟様」

「ええ、龍堂」

ヒナゲシさんとリュウドウさんが目配せをする。

「どうかしたんですか？」

キヨカが訊く。

なにかあったんだろうか。急に空気が張りつめる。

「あなたたちは感じない？」

「感じる？」

キヨカも俺も首を傾げる。

「蟲(ベステート)よ」

その言葉を聞いて、俺たちもようやく状況を理解した。

風伯を使いこなす事にばかり気を取られて、蟲(ベステート)の事を忘れていた。こっちが重要だつてのに。

「雛罌粟様」

そう言いながら、リュウドウさんは狼(ルーポ)を召還する。

「急ぐわよ。乗って」

俺たちは、慌てて橇(そり)に乗り込む。

「行くわよ」

そう言うが早いか、橇(そり)が動き始める。

俺たちは、振り落とされないようにするのが精一杯だった。

それからすぐに蟲(ベステート)が見えてきた。

この前と同じ、ダンゴムシのようなヤツだ。この前は、ヒナゲシさんの炎帝の炎でも効果がなかった。

だけど、今は違う。

俺が特訓している間、ヒナゲシさんも修練を怠っていなかった。炎帝の力は上がっているはずだ。それに、今回は俺もいる。前は使えなかった風伯も、今なら使える。これで、ヒナゲシさんの援護ができるはずだ。

この前は無理だったが、今回は封印できるはずだ。

やってやる。

「京極さん、助力をお願いします」

「もちろんです。今度こそ、あの蟲(ベステート)を封印しましょう」

橇(そり)が停止する。ここからは、歩いて近付く事になる。

俺は風伯を抜く。ヒナゲシさんも炎帝を抜いた。

俺の風伯はそのままだが、ヒナゲシさんの炎帝は、既に炎を纏っている。これが差だよな。

俺ももっともっと修行を積まないとな。

目標としては、ヒナゲシさんみたいになれるように……だな。最低でも、自分だけでなんとかなるように。

それはそれとして、今は目の前の蟲(ベステート)だ。まずはこいつをなんとかしないと。

「トールちゃん、頑張ってるね」

「おうよ」

キヨカの声援を受け、やる気は満々だ。別に、いいところを見せたってわけじゃないけど、言われるとやっぱり嬉しいもんだろ。

「じゃあ、私も頑張るね」

そう言って、キヨカはフルートを口に添える。

頼もしい相棒だよ。

キヨカが奏でる音色に合わせてるように、俺は蟲(ベステート)に向かって駆けていく。

その間にも、風伯が風を纏っていく。

(これならいける)

足下が雪なので、踏ん張れないのだが、それでもできるだけ足に力を込めて、風伯を横に薙ぐ

。

風伯から放たれた風は、かまいたちのように、蟲(ベステート)の体を斬り裂……………かななかった。確かに風伯の風は当たったのだが、蟲(ベステート)の外殻(がいかく)がそれを防いだ。

炎帝の時と同じだ。

風伯だと、物理的に斬撃として通用するかと思ったが、風伯でも外殻(がいかく)を通す事ができなかった。

これは、俺の修行不足だろう。もし、本来の力を引き出せていたら……。

「諦めないで」

ヒナゲシさんが声を掛けてくれる。

「一度や二度じゃ無理でも、繰り返せば効果があるかもしれない」

そう言いつつ、ヒナゲシさんも炎帝で斬りかかる。

炎帝が纏っている炎で、蟲(ベステート)は炎に包まれるのだが、やはり外殻(がいかく)のせいで、効果的なダメージにはならないようだ。

ヒナゲシさんの炎帝は、かなり本来の力を出しているはずなのだが、やはりこの天候が影響しているのだろうか。

さすがの炎帝の炎でも、この雪の中では多少は弱められてしまうのだろうか。

「雛罌粟様！」

リュウドウさんも、狼(ルーポ)で蟲(ベステート)に攻撃を繰り返している。しかし、蟲(ベステート)にはダメージを与えられていない。

こうなりゃ、蜘蛛(アラネーオ)の出番か……とも思うのだが、この天候では、蜘蛛(アラネーオ)は思うように動けないらしい。

実際、この世界に初めて来た時に、キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を召還して、なんとか雪から脱出しようとしたらしいのだが、蜘蛛(アラネーオ)は身動きがとれなかったらしい。

蜘蛛(アラネーオ)でも苦手なものってあったんだな。

どこか万能だと思っていただけに意外だった。でも、あっても当然だよな。万能なんてあるわけがない。

実際、神様だって、蟲(ベステート)を相手にどうしようもできない状況だ。俺たちだけしか、今はできない。

そうだよ。俺たちは、神様に期待されてるんだよ。神様を裏切るわけにもいかないんだよ。

だったら、もっと頑張れよ。

頑張ってるのはわかってるんだよ。

だけど、もっとだ。

もっと。

もっと。

もっと。

頑張るんだ！

風伯を正面に構える。

相手が人じゃないので、こうしてゆっくり構えられるのはいいな。試合とは違う緊張感はあるけど。

風伯の纏う風に集中する。

風伯の刀身は、俺の一部だ。俺の延長だ。

だから、この風は俺が纏っているものだ。

その風をひとつに集める。

「京極さん……」

ヒナゲシさんが声を掛けてくるが、すみません、今は返事が……。

「そのまま、集中して下さい。風を集める感じを想像して下さい」

ヒナゲシさんのアドバイス通り、風伯が纏っている風を、一点に集中するイメージで。風伯の先に集めていく。

……といっても、なかなかイメージ通りにはできない。

集中しろ。集中しろ。

こうでもしないと、俺たちに勝機はなさそうだ。

風伯の風に集中していると、周囲が疎かになっていたらしい。いつの間にか、キヨカが奏でる音色が変わっていた。別に曲が終わったとかでもなさそうだ。どうしたんだろう？

そう思うと、曲が耳に入ってくるようになった。

ん？

なんだろう？

この音楽……。

「キヨカ……」

ちらりとキヨカを見ると、にっこりと笑みを返してくれる。

あいつ……。

やるじゃないか。

音楽のお蔭で、風伯の風が集まってくる。

さすがキヨカだ。

***(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

キヨカのフォローもあって、順調に風が集まってくる。

それに合わせるように、キヨカの音も変わってくる。

こいつは、どこまでもありがたい。

キヨカの音に合わせてるようにして、風伯を大上段に構える。

俺とキヨカは、それぞれタイミングをはかる。

キヨカは、同じメロディを繰り返し、俺がタイミングをつかみやすいようにしてくれている。

本当にすごいよ、こいつは。

風伯の風は、刀の先に集まっている。

こいつをぶつければ、さすがの蟲(ベステート)でも無傷のはずがない。

耳を澄ませて、キヨカの音に集中する。

(よし、今だ！)

キヨカの音に合わせて、俺は風伯を振り下ろす。

風は、蟲(ベステート)に向かって飛んでいく。

「いっけえーっ！」

演奏をやめたキヨカが叫ぶ。

俺も同じように心の中で叫ぶ。

これが決まれば……。

「いけない！」

ヒナゲシさんは、俺の風の球を見て叫ぶ。

ダメだ。

俺が放った風の球は、今にも消えてしまいそうになっていた。

やっぱり、修行不足っていうか、いきなり実戦で実践するのは難しかったかも。

「その風を消させはしない」

ヒナゲシさんは、俺の風に向かって炎を放つ。

それを受けて、俺の風はヒナゲシさんの炎に包まれる。

風の球は、炎の球になる。

なんとか勢いを取り戻し、蟲(ベステート)に命中する。

さすがの蟲(ベステート)も、これは効果があったらしい。炎の球の勢いに後ずさる。

炎の球から逃げきれなかったようで、蟲(ベステート)は炎に包まれる。しかし、雪という現状では、炎はその勢いを弱めてしまう。

「京極さん、風を！」

えっ？

どういう事かわからないが、反射的に風伯を振る。

さっきみたいに、風を集めるような余裕がなかったので、ただ普通に風を放っただけだ。

風は炎に包まれた蟲(ベステート)に当たると、その炎が勢いを増していく。

「すげえ……」

轟々と唸るように燃える炎に見惚れてしまう。

なんて光景だ。

和めるような状況じゃないのに、どこか幻想的だった。

「京極さん、持続的に風をお願い」

「は、はい」

よくわからないまま、とりあえず風伯を振り続ける。

風伯の風を受けて、炎は勢いを増していく。

「これって……」

キャンプファイヤーとかで、風を送ってるようなものか。

という喩えだといいのだろうが、真っ先に浮かんだのは、七輪で魚を焼いている光景だった。

いいじゃないか。そっちの方が身近だろ。

要領がわかれば、後はこなしていだけだ。

風伯を程良く振って、炎の勢いを調整する。

「京極さん、素晴らしいです。もう少し炎を追加します」

と、ヒナゲシさんは炎帝を振る。

さらに炎が足されて、風伯の風で調整する。

もう、なにが目的かわからなくなってきたが、この炎に包まれれば、さすがの蟲(ベステート)も無事ではすまないだろう。丸焦げになっているはずだ。っていうか、なっていてくれ。

そう願わずにはいられない。

「続けて下さい」

「はい、わかりました」

どうやら、まだ蟲(ベステート)の活動は続いているらしい。それとも、念には念をとという事だろうか。

「雛罌粟様」

「龍堂、もう少し様子を観察して」

「畏まりました」

炎に包まれているので、視認するのは難しい。揺らめく炎の中に、丸くなっている蟲(ベステート)の様子が、かすかにわかるだけだ。

この炎のせいで、狼(ルーポ)はリュウドウさんの脇で、動向を見守っている。

「トールちゃん、どうなっちゃうのかな」

キヨカが寄ってくる。

今は、俺が風伯で風を送っているだけだ。

ヒナゲシさんは、炎帝を鞘に収めてしまっている。

このまま、蟲(ベステート)が活動を停止してくれれば……。

誰もがそれを願っている。

「京極さん、一度やめていただけますか」

「わかりました」

ヒナゲシさんの指示で、風伯を鞆に収める。

風伯からの風がなくなり、少しずつ炎が小さくなっていく。それでも、完全に鎮火するには、一時間近くかかった。

「どうなったかな……」

「このまま、片付けばいいんだけどな」

炎が消えても、蟲(ベステート)が動く気配はない。真っ黒……なのは元々だ。焦げ臭いので、少しは灼けているはずだ。

蟲(ベステート)の丸焼きか？

予想もしなかったものがここにある。

俺たちは、しばらく様子をうかがう。

「あなたたちは、ここにいて」

そう言って、ヒナゲシさんが蟲(ベステート)に近付いていく。

「雛罌粟様」

「龍堂は、狼(ルーポ)を待機させておいて」

「畏まりました」

リュウドウさんは、自身も行きたいだろうが、ヒナゲシさんの指示に従う。これが主従関係か。

ヒナゲシさんは、炎帝を抜いていつでも炎を放てるようにしている。ヒナゲシさんなら大丈夫だろう。

「トールちゃん」

キヨカが俺を見てフルートを口に添える。

「……………わかった」

俺も準備をしておけて事か。

そうだよな。不測の事態に備えておかないとな。なにもなければそれでいいんだし。

ヒナゲシさんは、慎重に近付いていく。

「トールちゃん、構えて」

そう言うと、キヨカはフルートを奏でる。

どういう事だ？

こいつはなにかを感じたのか？

それとも、念のために臨戦態勢って事か？

風伯が風を纏う。これで、いつでも斬れる。

「トールちゃん、斬って！」

なに？

キヨカの声に俺はもちろん、リュウドウさんとヒナゲシさんも驚いてキヨカを見る。

「トールちゃん、早く」

キヨカに急かされ、俺は風伯を振る。

それと同時に、丸まっていた蟲(ベステート)が動き出した。

「くっ」

キヨカに気を取られたわけじゃない。突然だった動きに反応が遅れた。

ヒナゲシさんは炎を放とうとしたが、間に合わない。

しかし、キヨカの判断で先に放っていた風が、動き出した蟲(ベステート)に当たる。

「トールちゃん、もう一回」

「お、おう」

キヨカに言われるまま、もう一撃を放つ。

「ルーちゃん、やっちゃって」

唐突なキヨカに、誰もが戸惑っている中、狼(ルーポ)はキヨカの指示通りに蟲(ベステート)に向かっていく。

狼(ルーポ)が蟲(ベステート)に襲いかかる前に、風伯の風が蟲(ベステート)に当たる。

そこに、狼(ルーポ)が体当たりすると、

「「「……………」」」

蟲(ベステート)の外殻(がいかく)に輝が入っていく。

俺たちは声が出なかった。

「ルーちゃん、もう一回」

キヨカは再び狼(ルーポ)に指示を出すと、狼(ルーポ)は体当たりを繰り返す。

やがて、輝だったものは、完全な亀裂となり、蟲(ベステート)の外殻(がいかく)が割れていく。

「リュウドウさん、封印」

キヨカがリュウドウさんに向かって叫ぶ。

「遠野様。我々は封印ではなく、退治を行っております。故に、この蟲(ベステート)はここで処分させていただきます」

あれ？ ヒナゲシさんとリュウドウさんたちは、封印してるんじゃないんだ。

「狼(ルーポ)、蟲(ベステート)を処分せよ」

リュウドウさんがそう指示すると、狼(ルーポ)は外殻(がいかく)が崩壊した蟲(ベステート)に噛みつく。

「わおっ」

それを見たキヨカが、奇妙な声を出す。

狼(ルーポ)は蟲(ベステート)を噛み砕いていく。

めきやめきやと音を立て、蟲(ベステート)がバラバラになっていく。

これを見ていたら、確かにキヨカのような声を出したくなる。

しばらくすると、蟲(ベステート)は無惨な姿になっていた。

その欠片を、今度はヒナゲシさんが炎帝の炎で焼き尽くす。

これで、蟲(ベステート)は完全に灰になった。

その灰は、風に舞うように散っていく。

これで終わりなのか……。

なんともすごい光景だった。

俺たちとは全然違う。

「すごいね、トールちゃん」

「……ああ、すごいな」

どう表現すればいいのかわからなかった。

「奇妙ね」

俺たちがその光景に啞然としている中、ヒナゲシさんが呟く。

「確かに奇妙でございますね」

リュウドウさんも同じ感想らしい。

なにが奇妙なんだろう？

「確かにそうですね」

と、キヨカまで同意している。

「おいおい、適当に合わせなくても……」

「適当じゃないもん。本当に変だよ」

なに？ 変？

どうやら、俺だけがわかっていないようだ。

なにが変だってんだ？

「だって、変でしょ。この雪、おかしいよ。ますます強くなってるよ」

「そうですね。この積雪は異常です。これまでもでしたが、さらに強くなっているようですね」

キヨカとヒナゲシさんが確認するように話している。

この雪か……。

そういえば、確かに元々異常な積雪だった。それが、ずっとここにいるので、慣れてきてしまっている。こんな事に順応してどうするんだ。

確かに、狼(ルーポ)が蟲(ベステート)を粉碎してから、降雪量が増えてきている。

「変だ」

「変なのはトールちゃんだよ。こんな事に気付かないなんて、鈍感すぎるよ」

「……ぐっ」

言い返すにも、事実なので受け入れるしかない。こんなにわかりやすいのに……。気付けなかった自分が情けない。

「……………そういえば、私たちって、蟲(ベステート)の封印してないよ」

「……………あっ」

そういえばそうだ。

狼(ルーポ)が蟲(ベステート)を粉碎して、これで終わりのつもりだったが、俺たちがしないといけないのは、封印を解いてしまった蟲(ベステート)の再封印だ。砕いてしまったら、封印できないじゃないか。

「ねえ、アーちゃん、どうなっちゃうのかな？」

そうだな。ここは蜘蛛(アラネーオ)に訊くのがいいだろう。蜘蛛(アラネーオ)ならなにかわかる

かもしれないし。

「蟲(ベステート) いまだ健在、

その言葉に、俺たちは言葉を呑んだ。

どういう事だ。

さっきの蟲(ベステート)は確かに灰になった。あんな状態になっても、まだ蟲(ベステート)が生きてるってのか？

「どうやら、これは他にも蟲(ベステート)がいるようね」

「どうやらそのようですね。狼(ルーポ)も蟲(ベステート)の存在を感じているようです」

「そうですね。私たちも蟲(ベステート)を追ってここに来ましたが、その前にヒナゲシさんたちがいたって事は、他にもいたって事ですよ」

「そうね。あたしたちも、蟲(ベステート)を退治するために旅をしているけど、それはあたしたちが追う蟲(ベステート)を退治するためだもの」

.....つまり、この世界には二体の蟲(ベステート)がいたって事か。

そんなの初めてだ。

.....だとすると、この雪は、俺たちが探している蟲(ベステート)の影響って事なのか？ それとも、この世界じゃこれが普通なのか？

まあ、そんなのはどっちでもいいや。とにかく、この雪はまだまだ降り積もりそうだ。

そして蟲(ベステート)を探さないといけない。

**(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

これで終わったと思ったのに、まだだったのは、精神的にくるものがあるな。

「とにかく、一度戻りましょうか」

「そうですね。ここに蟲(ベステート)はいないようです」

ヒナゲシさんとリュウドウさんに言われ、俺たちは元の場所に戻る事にした。

「ねえ、トールちゃん。私たちが探している蟲(ベステート)ってどんなのかな？」

帰りの櫓(そり)で、キヨカが訊いてきた。

「どんなやつだろうな」

どんなやうでも、なんとかかなりそうな気がしていた。

なにせ、俺は風伯の力を使えるようになった。それに、今はヒナゲシさんたちもいる。心強い

。

今なら、どんな蟲(ベステート)でも封印できそうな気がする。

その程度は傲ってもいいんじゃないか？

どうせなら、全部まとめてかかってこい。

そんな気持ちで、元の場所に戻る。

ううっ、寒い。

ずっと雪の中にいると、麻痺してくるといふか、慣れてくるんだけど、やっぱりこうして焚き火にあたると、寒さを実感するね。

「これから、どうしましょうか」

みんなで並んで焚き火にあたりながら、ヒナゲシさんが口を開いた。

どうするかって言われてもな……。これから、蟲(ベステート)を探して、封印しないとイケないだろ。ただ、相手が相手だけに、いつどこに現れるのかがわからない。

「できれば、私はヒナゲシさんたちにいて欲しいです」

俺が考えている間に、キヨカが先に答えていた。

いて欲しいって……。ヒナゲシさんたちは、いてくれるんじゃないのか？

「そうね。京極さんはどうかしら？」

「あ、あの……。それは、どういう……？」

「トールちゃん、無理しないの。せっかくだから、ヒナゲシさんたちに手伝ってもらった方がいいよ。アーちゃんが動けないし」

「あ、ああ、そうだな」

それはそうなんだが、どういう事だ？

「そうね。龍堂、しばらく残りましょうか」

「そうでございますね。京極様と遠野様の助力になれば、我としても本望でございます」

「決まりね。……そういうわけだから、あなたたちの目的が終わるまでは、ここに残るわ」

「ありがとうございます」

なんだか、俺だけ置いてけぼりだ。

茫然としていると、キヨカに、トールちゃんもお礼を言いなさいと、無理矢理頭を押さえられた。

「おい、キヨカ、どういう事だ？」

おおまかにはわかるのだが、どうしてこうなったのかが気になる。

「ん？ もしかして、トールちゃんは、なんにもわかってなかったの？」

キヨカがあぐりと口を開けている。鳩が豆鉄砲を食らったってのは、こういう顔なんだろうか。

「トールちゃん、鈍いにもほどがあるよ」

なんだか、可哀想とでも言いたげに、肩に手を置かれる。なんだろう、この屈辱的な事は。だが、受け入れざるを得ない状況なんだろう。

「最初から、トールちゃんにもわかりやすく説明するね」

俺ってこういうキャラだったっけ？ .....でも、実際そうだよな。この旅に出てから、キヨカはなんだかんだでしっかりとしている。どちらかという、俺が説明を求める事が多い。

俺って、日常から離れると、こんなにダメだったんだな。どれだけ、枠の中で生きてたんだって感じだな。

「さっき蟲(ベステート)を倒したでしょ。あれは、ヒナゲシさんたちが追っている蟲(ベステート)だったから、ここでのヒナゲシさんの目的は終わったわけでしょ。だから、ヒナゲシさんたちは、本当なら次の世界に向かって、他の蟲(ベステート)を倒さないといけないの。だけど、私たちの目的の蟲(ベステート)は、まだ見つかってもないわけ。だから、ヒナゲシさんが協力しましょうかって言ってくれたわけ。それで、私は手伝って欲しいと言った。そうしたら、ヒナゲシさんたちは手伝ってくれるって言ってくれた。理解できた？」

まあ、話の流れでなんとかわかってはいたが、あの短い中でそれだけの意志疎通が行われていたって事か。日本語って、省略が多いからな.....。難しいよな。

「わかった。理解した」

「それならいいけど、ここまで説明しないとけないって、トールちゃんって本当に日常生活.....っていうか、キャンパスライフが成り立ってたのかな.....」

「どういう意味だ？」

「だって、こんなにも物わかりが悪いんだよ。トールちゃんと一緒にいると疲れるよね」

むっ。それは失礼じゃないか。

「さすがにそれは言い過ぎだろ」

「どうだろうね。トールちゃんの自覚がないだけで、周りの人たちがどうだかわからないでしょ」

「おいおい、それこそお前が言うような事じゃないだろ」

「そうかもしれないけど、自覚はした方がいいよ。トールちゃん、自分が思ってるほど、理解力ないよ。きっと、マニュアルとかテキスト通りじゃないとダメなタイプだね。応用力をつけないと」

テーブルがあったら、思い切り殴りたいところだ。だが、あいにくここは雪しかない。仕方

なく雪を殴ると、ずぼっと拳が埋まる。

「うるさい。どうして、そんなに言われなきゃいけないんだ」

「ちょっと、トールちゃん。落ち着いてよ」

「俺は落ち着いてるさ。確かに、俺はさっきの話しについていけなかったけどな、だからってお前にそんな風に言われる筋合いはない」

「悪かったってば。だから落ち着こうよ」

「落ち着いてるって言ってるだろ」

ああ、そうさ。俺は落ち着いている。冷静だよ。だから、余計にキヨカ言葉が癪(かん)に障(さわ)る。

ふと周囲を見ると、ヒナゲシさんとリュウドウさんは、どこかへ移動しているようだった。荷物はここにあるので、周囲の探索でもしているのだろう。

だとしたら、俺たちだけがここでのんびりしているわけにはいかない。探さなきゃいけないのは、俺たちが担当している蟲(ベステート)だ。俺たちが探さないでどうするんだ。

「キヨカ、俺たちも蟲(ベステート)を探そう」

「……あ、うん」

キヨカはどことなく戸惑っている。

「俺たちがなんとかしないとイケない蟲(ベステート)だぞ。ヒナゲシさんたちだけに任せるわけにはいかないだろ」

「……………うん」

キヨカは覇気なく答えて、ゆっくりと立ち上がる。

「俺はあっちを探してみるから、キヨカはそっちな」

ここは手分けして探す方がいいだろう。

「……トールちゃん」

キヨカがなにかを言いたそうにするが、すぐに口を噤んでしまう。

「どうしたんだよ。はっきり言えよ。ずばずば言うのがお前だろ」

なんだよ、気持ち悪いな。らしくない。

「ううん、なんでもない。わかったよ。私は、あっちを探すね」

そう言うと、キヨカは雪の中を歩きだした。

「ったく……なんだよ」

釈然としない。

いきなり説教してきたと思ったら、次は黙(だんま)りかよ。

とにかく、今はキヨカの事はどうでもいい。とにかく蟲(ベステート)だ。蟲(ベステート)を見つけないとな。

さくさくと雪の中を歩く。

妙にイライラする。なんだよ、キヨカのヤツ。

「ああ、むしゃくしゃする。思い切り蟲(ベステート)を斬りたいっ！」

ストレス発散ってわけじゃないが、蟲(ベステート)を斬りたくてしょうがない。しかし、そうい

う時に限って、蟲(ベステート)は姿を見せない。

鞆に入ったままの風伯を振る。

降っている雪を虚しく斬るだけだ。

なんの手応えもない。

なんだろうな。こんなの初めてかもしれないな。

今日のあいつは、なんだか変だ。いつもなら、もっと……。

いつもって、どんなだっけ？

そうだよ。いつもなら、明るくさ、莫迦みたいに笑ってるのに。

さっきは、変に真剣な顔しやがって。それに、なんだか説教じみた事まで。

あいつらしくないってんだ。

もっと、のほほんとしてりゃいいんだよ。

苛立って、ぼすっと雪を蹴り上げようとして……あまりの重さに、足が上がらなかった。

「くそっ」

余計にイライラしてきた。

「蟲(ベステート)! 出てきやがれってんだ!」

大声で叫んでも、雪に音が吸収されてしまって響かなかった。

**(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

元の場所に戻ると、ヒナゲシさんとリュウドウさんが、夕食の準備をしてくれていた。

「おかえりなさいませ。体が冷えておいでではないですか？ こちらで暖をとって下さい」

リュウドウさんが焚き火にあたるようにすすめてくれる。

「ありがとうございます」

その言葉に甘えて、焚き火に手をかざす。

「ああ、あったかい」

焚き火にあたると、思っていたよりも体が冷えていた事がわかる。人類にとって炎ってのは偉大な.....。

「ただいま」

そこへ、キヨカが戻ってきた。

「おかえりなさいませ。遠野様も、どうぞ暖をとって下さい」

リュウドウさんは帰ってきたキヨカにもすすめる。

「ありがとうございます」

キヨカは、リュウドウさんに礼を言うと、俺の向かいになる位置で焚き火に手をかざす。

「.....」

「.....」

無言で一瞬だけ視線が交錯する。

しかし、すぐにどちらからともなく視線を逸らす。

なんだろうな、この居心地の悪さは。

会っていなかった時間の方が長いのだが、小さい頃はキヨカとこんな風になる事はなかった。

そりゃ、子どもだし喧嘩くらいはしたけど、こんなんじゃなかった。

もしかしたら、初めてなのかもな。

もっとも、これが喧嘩なのかよくわからないんだけどな。

喧嘩じゃないなら、普通に話せばいいと思うのだが、今は普通ってどうだったかわからない。

つうか、喧嘩もなにも、あいつが急に説教するとか、似合わない事をしたからだよな。

別に俺は怒っているわけじゃない。あいつが変だから、どう相手をしたらいいのかわからないだけだ。

「.....」

「.....」

この無言はなんとかならないのか。

キヨカがいつもみたいに、のほほんとしてりゃいいんだよ。チラッと見ると、なんだか妙に真面目っぽい顔してるし。

ああ、きつついな。

だからって、俺から話す必要もない。

あいつから、いつもみたいに話し掛けてくるなら、こっちだって話してやるんだけどな。

そんな沈黙のまま暖をとり、夕食を食べ、就寝する事になった。

俺たちは、その間もずっと無言だった。

ヒナゲシさんとリュウドウさんも、そんな俺たちに対して、特になにかを言うような事もなかった。

***(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

翌日、翌々日と、俺たちの関係に変化はなかった。

こんなに会話がないのって、初めてかもしれない。

キヨカといると、なんだかんだで余計な事を話していた気がする。

そのせいだろうか。たった二日——あの最初の日を入れると三日か——なのに、話していないのが気持ち悪い。

いやいや、キヨカが元に戻ればいいんだ。俺がどうこうするようなものじゃない。

そもそも、話す必要がないから話していないだけだからな。無理に話す必要なんかないんだっての。

「それじゃ、私はまた蟲(ベステート)を探しに行ってきます」

「じゃあ、俺も」

キヨカが立ち上がって、雪原へ向かおうとしたので、負けじと俺も立ち上がる。なんとなくだが、負けるわけにはいかない。俺が蟲(ベステート)を見つけて封印するんだ。

キヨカはそんな俺をちらりと見ると、なにも言わずに雪原に向かった。

なんだ、あれ。

とにかく、俺も雪原に向かう。……といっても、周囲は全部雪原だけど。

周囲が全て雪原で、目印になるものがないので、あまり離れる事ができない。

焚き火の煙を目印にしないと、あっという間に迷子になってしまう。

その煙を確認しながら、あまり離れられないので、蟲(ベステート)探しは困難な状況だった。

どこまで行っても雪だ。どこを探して、どこを探していないのかわからなくなってくる。

もう、何日も探して見つからないのだから、もっと遠くにいるのかもしれない。

だけど、蜘蛛(アラネーオ)が感じるのは、それほど遠くない場所かららしい。

時折吹雪くので、正確な場所がわかりづらいようだ。

そのせいで、結局こうして風漬しに探す事になる。

狼(ルーポ)も自らが探している蟲(ベステート)じゃないので、存在をなかなか感知できないようだ。

結局は蟲(ベステート)次第というか、蟲(ベステート)が出てきてくれないと、俺たちはなんにもできていない。

それがさらにイライラする。

「ちくしょう。どこにいやがるんだよ」

苛立って、雪を蹴り上げる。

ふわりと散り散りになる雪は綺麗だが、今はそれに、見惚れている余裕はなかった。

「探すか」

なんの手掛かりもなく、雪の中を歩き回る。

なんの目印もない雪原を歩いていると、この世界には自分しかいないんじゃないかって気がしてくる。それは、この世界の中心というよりも、俺だけがこの世界に取り残されたような寂寥

感だ。ただ淋しさだけだ。

遠くに見える煙が、さらに淋しく思わせるのかもしれない。

結構、遠くまで来ていたらしい。もっとも、ここ数日、この辺は探し尽くしたので、出来るだけ離れていく必要はあった。

蟲(ベステート)の方から近付いている事がない限り、探索範囲は広げていかなければならない。

「どこにいやがるんだ？」

探している蟲(ベステート)の姿はわからないが、自分たち以外に動くものがあれば、それは蟲(ベステート)以外はないだろう。

「それにしても寒い。それに、視界が悪すぎだろ」

拠点にしている場所から離れると、気のせいかわ雪と風が強くなっているように思う。あの場所は、ちらちらと降っているだけだが、この辺りは吹雪に近い。

「ちょっと強すぎやしないか」

このままだと、完全に遭難してしまう。そもそも、既に目印になる煙は見えない。

真っ直ぐ進んできたはずだ。

このまま、振り返って真っ直ぐ戻れば、元の場所に戻れるはずだ。

「よし、戻ろう」

これ以上は断念する事にした。遭難してしまったら、死を待つしかない。それだけは避けたい。

くるりと振り返って、一步を踏み出す。

足跡を頼りにしようにも、雪と風がすぐにそれを覆い隠してしまう。それに加えて、視界が悪いのでそもそもそれを見つけるのも困難だ。

「こりゃ、まずいかも……」

こうなると勘しかない。

このまま、ここにいて我慢する方がいいのか？ いつ止むかわからない吹雪だ。このまま、凍死してしまうかもしれない。だが、遭難する確率は減るだろう。ただし、命と引き替えという、危険な賭けだけど。

「いやいや、無理だろ」

そんな危険な賭けはできない。

勘に頼るしかないが、動いていないと凍えてしまう。

どれだけ目を凝らしても、目の前しか見えてこない。視界は一メートルもないんじゃないか？

風と雪のせいで、ゆっくりとしか進む事ができない。そもそも、本当に進んでいるのかもわからない。気付かないうちに、押し戻されていてわからない。なにせ、景色が見えないんだから、自分がどうなっているのかもわからない。

「ったく……」

それでも、とにかく一步を踏み出さないわけにはいかない。少しでも戻れる確率が高いように、行動をし続けなさいといけない。

ゆっくりと、ゆっくりと、風と雪を掻き分けながら進む。

ぼすっぼすっと、歩く度に足が雪に沈む。

雪対策をしても、ここまで雪がすごいと、さすがに無理らしい。

人間なんて、自然の力には勝てないよな……。

本当に弱い。

そして、人間は独りではなにもできないってか。

「てっ」

真っ直ぐ歩いていると、なにかにぶつかった。

「なんだ？」

周辺には、建物なんかはなにもない。

もしかして、木にでもぶつかったのか？

だけど、近くにそれらしいものはなかった。

もしそうだとしたら、俺は見当違いの方向に向かっているって事か。

「ててて……」

それにしても、なにに当たったんだろう？

そもそも、木だったとしても、ほとんどが埋まってしまっていて、顔を出しているような木はなかったはずだ。

ましてや、一面の雪原で、山もなければ岩もない。

つまり、なにかにぶつかるなんて事はないはずだ。

それなのに、確かに目の前にはなにかがある。

雪のせいで、ほとんど見えないのだが、確かになにかがある。

いったいなんなんだ？

視界が悪いので、手探りしかない。恐る恐る手を伸ばす。なにがあるんだ？

手を伸ばしたまま、ゆっくりと近づく。

「ん？」

なんだろう？ 堅いものがそこにある。

でも、木のような感じじゃない。樹皮のようなざらざらした感じはない。むしろ、つるつるしている気がする。

だとしたら、岩でもないのか？ ゴツゴツ感もない。これが岩だとしたら、大理石のようにツルツルした岩だって事だ。

「もしかして……」

ツルツルした感じという事は、もしかして氷の塊なのか？

表面が冷たいのは、そのものが冷たいのか、ここが冷たいからなのか、どっちなのかはわからない。

とにかく、なにか大きなものが目の前にある。

なんだろう？

とにかくわからない。

目隠しをされていたり、箱の中に手を入れたり、なにかを当てるゲームでもしている気分だ

。実際にした事はないけど。

そんな不思議な感覚で、その目の前のなんだかわからないものを触る。

正直、危険なものだったらどうしよう……とか思うのだが、今の状況が既に危険なので――リアル命の危機だ――毒を食らわば……ってな感じだ。自暴自棄になっているのかもな。

でも、この吹雪の中、どうしようもできない状況にいれば、とりあえず目の前の事だけに集中するしかない。

第一、寒さを感じなくなっている時点で、限界のなにかを突破していると思う。

「それにしても、こいつは本当になんなんだ？」

ぺたぺたと触るが、本当につるつるした感触だけで、なにかがわからない。冷たいのは確かだが、それは気温によるものだろう。

こんこんと叩いてみると堅い。堅くて大きなものってなんだ？

せめて見えればな……。

視界がよければいいものの、全く見えない。

どのくらいの大きさなのかを移動して確認したいのだが、足が雪に埋まってしまって、思うように動けない。

ああ、顔が痛い。

寒さもそうだが、吹き付ける雪が容赦なく当たってくる。

今は、なんだかわからないものが、少しだけ遮ってくれているので、幾分かはマシになっているものの、尋常じゃない吹雪だ。ゆきっていうか、氷だよな、これ。粉雪ならまだしも、雪同士が塊になって吹き付けてくるんだから凶悪だ。

この謎の物体に隠れて、この吹雪をやり過ぎそうかとも思うのだが、気のせいかな雪の勢いが増してきているように感じられる。

「うわっ」

そんな事を考えていると、謎の物体が動いた。

なんだ？ もしかして、崩れるのか？

雪のせいで傾いたのだとしたら危険だ。このままだと、下敷きになる恐れがある。仮に反対に倒れても、その衝撃でこの雪の足場がどうなるのか想像も出来ない。

ただ、近くに山がない事は安心材料だ。雪崩の心配はなさそうだ。

「うわ、うわわっ」

その間にも、なんだかわからないものが動いている。

「……ん？」

ここでようやく、俺はその可能性に気付いた。

こいつって、もしかして生き物なのか？

動き方が不自然だ。ある意味自然なのだが、倒れているという動きじゃない。なにかが移動しようとしている感じだ。

しかし、生き物だとしてなんだろう？

これが脚だとすれば、かなり巨大な生物だという事になる。

この世界の人や動物を、今まで一度も見えていないので、この世界がどういう世界なのかがわかっていない。人が存在しているのか、それとももっと原始的な世界なのか、それすらもわかっていない。

ただ、雪に覆われているという事だけだ。植物はあるので、昆虫などの生物ならいるのかもしれない。

「————っ！」

昆虫？

そうだ。

もっと可能性があったんだ。

巨大な生物だと思った瞬間に、どうして思い浮かばなかったんだろう。

なにか、その選択肢を除外していたんだろうか。

この世界特有の生物かと考えるよりも、俺にとってはもっと身近な生物がいたはずだ。

最も出会いたくて、最も出会いたくない生物が。

「——蟲(ベステート)かっ」

その可能性に至った瞬間、目の前のものから離れようとしたが、雪に足を取られてしまって動けない。

「ちくしょう」

俺はなにをしていたんだ。

あんなにぺたぺたと。暢気にもほどがある。もっと緊張感を持ってっんだ。

なんとか雪から脱出しようと足掻く。少しでも離れないと。

それなのに、なかなか動けない。

ちくしょう。

もどかしくて仕方ない。

まあ、目の前のものが蟲(ベステート)だと確定したわけじゃない。だが、考える限り、その可能性が高い。

目の前のそれは、ゆっくりと動いている。

おそらくは脚であろう目の前のそれを、ゆっくりと持ち上げていく。

その動きで、周囲の雪が巻き上げられる。

巻き上げられた雪が、容赦なく俺を襲う。

そのせいで、余計に動きづらくなってしまう。

そんな悪戦苦闘がどれくらい続いたんだろうか。時間の感覚が全くなくなっているのに、よくわからないが、一時間は経っている気がする。

目の前のその正体が、ようやくわかり始めていた。

ゆっくりとだが、それが動く事で視界が少しだけよくなった。

というよりも、それが俺に向かってくる雪を遮っているのだ。

そのお蔭で、目の前の正体がわかった。

「蟲(ベステート)」

そいつは、間違いなく蟲(ベステート)だ。

この世界に、そういう生物が本来いる可能性だってなくはないが、こいつは間違いなく蟲(ベステート)だ。こんなものが、平然と存在して欲しくない。

足場が悪く、このままだと蟲(ベステート)に対抗できない。それでも、なんとかしないとけない。

風伯を抜いて構える。

それにしても、蟲(ベステート)のお蔭で視界がよくなって、少しは闘いやすくなったなんて、なんだか皮肉な感じだな。

目の前の蟲(ベステート)は、俺に気付いていないのか、それとも気付いていて無視しているのか、襲ってくる様子がない。ただその場に悠然と存在している。

「なんなんだ？」

わからない。

もともと、蟲(ベステート)の気持ちをわかろうとも思わないし、わかる人なんていない気もする。

それでも、なにもせずに悠長にいるわけにはいかない。

「俺だけでもやってやるさ」

相手が攻撃してこないのなら楽だろう。

落ち着いて風伯を構える。

切っ先を向け、吹き付けている雪が、刀身に纏うのをイメージする。

その延長で風をイメージ。

ただの風じゃなく、吹雪を纏うような感じで……。

その方がなんとなく強そうだし。だって、普通の風よりも、そっちの方がよさげだし。斬れ味抜群って気がしないか？ 氷の刃って感じで。

「—————」

しかし、実際はそううまくいくわけもなく、俺は寒風に晒されているだけだ。

やっぱり、キヨカのサポートなしじゃ無理なのか。

だけど、今はそれに頼る事ができない。俺だけの力でなんとかしないと。

……………現実ってシビアだな。

蟲(ベステート)が攻撃してこないってのだけでも救いかもな。

氷の刃どころか、風の刃すら形成できない俺は、風伯の刀身のみで勝負するしかないって事になる。

それで蟲(ベステート)の相手が出来るのだろうか。

旅に出た当初なら、それくらいは自意識過剰だったわけだが、少なくとも今はそんな余裕はない。

まだまだ少ないが、幾度か蟲(ベステート)と対峙してきて、その程度には自分の実力っていうか、身の丈をわかっているつもりだ。

だからこそ、キヨカに言われた事が痛い。

ったく、キヨカのくせにあんな事言いやがって。

思い出したら、イライラしてきた。

この勢いで、蟲(ベステート)をぶっ飛ばしてやれそうだ。――まあ、無理だけど。

とにかくやってやれ。

――と、斬りかかろうとしたが、足が動かないんだった。雪に沈んだまま、動けないので、どう足掻いても蟲(ベステート)に近付けない。

しまった。

がぼーん！ ってやつだ。

風伯に風を纏わせる事ができれば、動けなくても攻撃できたのに。未熟さがつらい。

ぼすっぼすっと足を抜いて、できるだけ蟲(ベステート)に近付く。

さっきは距離をとったくせに、また近付いていくなんて、なにやってんだらうね。

苦労しつつ近付いて、風伯を振り回す。

本当なら振り下ろすとかしたいんだが、力がうまく入らないので、風伯を振り回す事しかできない。

そんなせいで、なんとも惨めというか、情けない状況になっている。

そもそも、風伯を振り回すのも力があまり入っていないので、ダメージを与える事は難しいだろう。それでも、なんとか一矢を報いるというか、抵抗というか、行動をしてないと立つ瀬がない。

えいや、えいや、と子どもがおもちゃの刀を振り回すようにしていると、今まで動かなかった蟲(ベステート)が、さすがに動いてきた。

「うわっ」

今まで見ていなかったが、こいつの前脚は鎌のようになっていたようで、そいつが思い切り振り下ろされてきて、あやうく串刺しになるところだった。距離を縮めていたお蔭で、串刺しだけは免れた。もう少し離れていたら、確実に串刺しだっただろう。

っていうか、こいつが攻撃を始めたって事は、マジでヤバいって事だ。

俺は思うように動く事ができない。そんな状況で、こいつの鎌が襲ってきたら……。

考えるだけで背筋が凍る。

逃げないと。

そんな気持ちと、下手に離れると串刺しの危険性と……と、そんなジレンマに悩まされる。

どうしよう？

このまま近くにいる、鎌を……いや、安全とは限らないよね。

かといって、逃げると、その最中に……。これが一番危険度が高いかも。

本当にどうしたらいいんだらう？

俺だけの力で対処できれば問題ないんだけどな。

「うわっ！」

うじうじと悩んでいると、思わぬ衝撃が襲ってきた。

なんだ？

――と確認する前に、俺の体は宙を舞っていた。

雪とともに、俺は空の人になろうとしている。

こういう瞬間って、どうしてスローモーションになるんだろうな。時間にすれば一瞬のはずなのに。

そして、その一瞬の空中浮遊を体験し、俺は重力に従うように、降り積もった雪に叩きつけられる。

「……っ！」

息が押し出される。

叩きつけられて、体全体が痛い。

ヤバい。殺される。死ぬ。

――本気で死を実感した。

「――っ！」

再び宙を舞う。

飛ばされる。

落下の衝撃で、降ったばかりで柔らかい雪に埋まる。

ヤバい。マジで動けない。

じたばたと足掻くが、このままだといつか串刺しにされちまう。

……………無理。

俺の旅は……っていうか、俺の人生はここで終わるのか。雪に埋もれていたら、死体が腐らなくていいかも。冷凍保存されて、未来に発見されたり……なんてね。

もう、できるのは妄想と現実逃避と走馬燈を見る事くらいだろうな。

ごめん、キヨカ……………。

**(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

「……………ん。……………って、……………ん。……………きて……、……………ちゃん。……起きてよ。……………トールちゃん、トールちゃんってば。起きてってば、トールちゃん」

なんだ？

あの世か？

そういや、この世界に来たばかりも、こんな事があった気がする。数回、臨死体験したよ  
うな……。

この世界って、死が近いのか？

寒さのせいもあるんだらうけど、こういう展開ばっかだよな。

「……………ちゃん。トールちゃんってば」

もう、どうとでもなれってんだ。

どうであの世だったら、どうしようもないしな。

天国かな……。地獄かな……。

「起きなさいってのっ！」

パンッ！ と乾いた小気味のいい音が。

そして、ヒリヒリとした痛み。

……………。

なんだ、この仕打ちは。

「……起きてよお」

なんだか重みが。

ぐえっとした重み。

「起きなさいってばあ」

なんだよ、もう……。

ぺちぺちと痛みが。

そして、ぐらぐらと体を揺さぶられる。

そっとしておいて欲しいな……。

「起きてよ、トールちゃん」

ゆさゆさと体が……それが、ころんとひっくり返すように転がされる。

「んあっ？」

どうしたんだ？ どうして、ゆっくりさせてくれないんだろう？ 不親切というか、せっかち  
というか……。

あまりにもあまりなので、仕方なく目を開けようとする。なんだか体が重い。節々はもとより、  
瞼も凍っているような感じで、開けるのも一苦勞といった感じだ。それでも、ゆっくりと開  
ける。

「トールちゃん！ トールちゃんだ！ よかったよお！」

なんとか目を開けた瞬間、衝撃が体を襲い、息が出来なくなる。

「トールちゃんだ、トールちゃんだ」

ゴホゴホと咳こみながら、現状を把握しようとする。――が、さっぱりだ。

「キ……ヨ……カ？」

俺に抱きつくように……というか、ホールドしているのは、間違いなくキヨカだ。

えっと……どうなってるんだ？ どうして、俺はキヨカにこんな事をされているんだろう？

「やっと目を覚ましたよ。本当に、心配ばかり掛けるんだから」

ポカポカと叩かれるのだが、俺にはよくわからない。

それよりも――

「蟲(ベステート)だ。蟲(ベステート)に、俺……。蟲(ベステート)が……」

がばっとキヨカを押し退けるようにして、上半身を起こす。

「なに言ってるの。落ち着こうよ」

キヨカが押しつけるようにして、もう一度寝かせようとしてくる。

「キヨカ、蟲(ベステート)だよ。蟲(ベステート)がいたんだ。それで、俺……」

「落ち着こうって」

落ち着けるわけがない。落ち着いていられるか。

蟲(ベステート)だぞ。俺たちが探していた蟲(ベステート)がいたんだ。それで、その蟲(ベステート)に殺されそうになって……。

……………あれ？ 俺って、生きてるのか？

「とにかく、今は大丈夫だから」

キヨカが俺の頭を撫でる。

「大丈夫だから、落ち着いて。それから、ゆっくり話してよ」

きゅっと抱きしめられると安心してきた。なんだろう、不思議だ。ただそうされているだけなのに、不思議と落ち着いてくる。

「順番に教えてよ。……でも、とにかく、トールちゃんが無事でよかったよ」

ぽろぽろと、冷たいものが頭に落ちてくる。なんだろうと思って、顔を上げようとする、

「見ないで」

と、ぐいっと頭を押さえられる。

なんだよ……と思いつつも、無理に上げようとは思わない。ここで顔を上げるなんて無粋な真似、できるわけないよな。

それから、しばらくキヨカに抱かれていた。

大変な事があったが、今こうしていられるという事が全てだった。

「すまん、キヨカ」

ゆっくりと顔を上げる。

「私こそ、ごめんだよ、トールちゃん」

そこには、キヨカの笑顔があった。

「どうしてキヨカが謝るんだよ。別に……」

別に謝らなくても、俺が悪かった……と言いかけて、ずっとキヨカが悪いと思い続けていた事に気付く。

なんだろうな、俺ってば。矮小だったって事か。

「とにかく、俺が悪かった。俺は、独りじゃなにもできないくせに、それがわかってなかったんだ。本当にごめん」

深々と頭を下げる。

「私こそ、言い過ぎたよ。トールちゃんだって、ちゃんと頑張ってるもんね。それなのに、私ったら……」

「いや、キヨカの指摘は最もだった。俺はキヨカがいなくなにもできない。それを嫌ってほど実感させられた」

「仲違いも終わったようね」

このままだと俺たちは、自分が悪かったと言いかけていたんだろう。そこにヒナゲシさんが割って入ってきた。

「心配掛けてごめんなさい」

キヨカが謝る。

「謝罪の必要はないわよ。あたしは、少しあなたたちが羨ましかっただけだから」

「羨ましい？」

どういう事だろう？ 喧嘩をしていたわけだろ。それが羨ましいって意味がわからない。

「そうね。あなたたちにはわからないかもしれない。だって、それが当たり前のようにできているのだから。だから、想像もできないでしょうね」

ヒナゲシさんは、どこか遠い目をしていた。

「でも、喧嘩はしない方がいいですよ。私だって、好きでしているわけじゃないですもん」

「それでも、羨ましく思えるのよ。喧嘩をするという事は、相手に自分を全て伝えるという事だと思うの。遠慮があれば、喧嘩はできないでしょ？」

「そうですね。私が自分の言いたい事を、全部トールちゃんにそのまま言ったから、トールちゃんを傷つけちゃったわけだし……」

「そういう相手がいるというのは、素敵な事だと思うの。だから、羨ましいの」

なんだか、俺にはわかりそうもない。仲がいい相手なら欲しいと思うけど、喧嘩をする相手ってのはな……。

「私も、なんとなくだけど、わかる気がします。本音でぶつかっていける相手って、やっぱり欲しいと思います」

「……そうね」

なんだろう？ キヨカは理解できるらしい。やっぱり、同性同士だからこそなんだろうか。それとも、俺がただ単に鈍いだけなのか？

……って、なんだか和やかにしてるけど、なにか忘れていたような気が……。

なんだったっけ？

思い出そうとしても思い出せない。

なにか大切な事があったはずだ。

それなのに……。

なんだったっけ？

思い出せないや。

でも、思い出せないって事は、それほどたいした事じゃなかったって事だろうか。

だけど、そうでもない気がするんだよな……。

なにか重要な事だったはずなんだけど……。

「ねえ、トールちゃん、あそこでなにがあったのか、教えてよ」

「あたしも教えて欲しいわね」

キヨカとヒナゲシさんが、じっと俺を見る。その傍には、いつの間にかリュウドウさんの姿もあった。そのリュウドウさんも、じっと俺を見ている。

なんだ？ どうしたんだよ。

「ねえ、トールちゃん。なにがあったのか、教えて欲しいんだ。蟲(ベステート)がいたんだよね」  
———っ！

「———そうだった！ どうして、忘れてたんだ？ 俺、蟲(ベステート)と……」

どうして思い出せなかったんだ。これ以上に重要な事なんてないだろ。

俺ってどこまで莫迦なんだよ。

「詳細をお願いします」

普段はあまり言葉にしないリュウドウさんが訊いてくる。それだけで、余程の事だと実感させられる。

「わかりました。……順に話していきます」

キヨカとの喧嘩があったので、なんとなく恥ずかしかったが、これは必要な事だ。

俺としても、キヨカやヒナゲシさんたちの助けが必要になってくる。そもそも、俺だけの問題じゃない。

恥ずかしいところも多々あったが、それでも順に話していく。

猛吹雪の中、蟲(ベステート)に遭遇して、そしてなにもできなかった事を。

三人とも、俺の話を黙って聞いていてくれた。俺が未熟だったって話だからな……。本当に恥ずかしいんだよな。

「なるほど、そういう出来事があったんですね」

「トールちゃん、頑張ったんだね」

「そのような状況で、ご無事だった事、喜ばしく思います」

なんだか、そういう風に言われると、余計に恥ずかしいな。

「それにしても、俺はそこで気を失ったみたいでさ、よくわからないんだよ。俺、どうなってたんだ？」

俺は蟲(ベステート)に吹き飛ばされた後、次に気が付いた時はキヨカがいた。しかも、ヒナゲシさんたちのベースキャンプに戻っていた。もちろん、俺が自力で戻ったとは思えない。

だったら、なにがあったんだろう？

それに、あの蟲(ベステート)はどこへ行ってしまったんだろう？

「なあ、キヨカ。俺はどうなってたんだ？」

「そうだね……。気になるよね。えっとね———」

***(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

「――ってな事があったんだよ」

キヨカが涙を浮かべながら説明してくれた。

俺って、そんなに危なかったんだ。

まあ、蟲(ベステート)を相手に、蜘蛛(アラネーオ)の手助けもなく、一人でなんとかしようとしたわけだしな。無謀だったかもしれない。

だけど、あの状況だとそれしかなかった。

逃げる事ができなかった。だから足掻いた。ひたすら生きたいと願った。

その結果がこれだ。

俺は、キヨカに助けられた。

キヨカは命の恩人になるんだろうな。

しかし、キヨカの説明を聞いていると、頬が痛くなってきた。

起きなかった俺が悪いんだろうけど、だからってなあ。

俺だって好きで寝てたわけでもないんだけどな。

極限状態だったわけだし、しょうがないだろ。

それにしても、キヨカも凄い事をしてくれる。まさか、人肌でなんて、実際にされる事があるなんてな。

記憶がないのが、ある意味じゃ救いだよな。もし覚えてたら、どうしていいのかわからないよな。こうして、普通に話せるなんてできないだろうし。

「とにかく、ご無事でなによりでございます」

「そうね。命があっただけ幸運だったかもしれないわね」

そうだ。蟲(ベステート)だけじゃなく、あの吹雪の中だ。

キヨカたちに見つけてもらっただけでもラッキーだった。もし、雪に埋まってしまったら、さすがに見つけ出すのは不可能だっただろう。なんとか見つけてもらえてよかった。

「それにしても、あなたたちが追っている蟲(ベステート)は厄介ね」

「どうしたらいいと思いますか？」

キヨカの質問に答えられる者はいない。

あの蟲(ベステート)が吹雪の原因だという事は、既に誰もがわかっている。

この状況は、あの蟲(ベステート)が作り出したという事になるんじゃないだろうか。そうだとすれば、この異常な量の雪も納得できる。明らかにこの降雪量はおかしい。

「蟲(ベステート)を発見するには、吹雪を目標にすれば問題ないでしょう」

「そうね。だけど、その先が問題よ」

ヒナゲシさんとリュウドウさんが、肩を寄せて現状をどう打破するかを相談している。

「はい。いくら発見しましても、あの蟲(ベステート)には……とといいますか、あの環境では、雛罌粟様の炎帝では、なかなか……」

「そうなのよね。風伯の力でなんとかならないかしら」

「炎の勢いを増すか、もしくは吹雪を斬り裂くかという事になりますね。果たして、それだけの事ができるものなのでしょうか」

「京極さんが、風伯を使いこなせているかどうかという問題でもないわね。程度が異なりすぎているわね。比較できるようなものではないのが問題かしら」

「はい。ですが、打破する方法は、それしかないように思われます」

「あたしも同意見よ。力押しの、無理矢理でしかない方法だけど、それが一番確実でしょうね」

「とにかく、するしかないでしょう」

そこでようやく俺とキヨカを見る。

「聞こえていたと思いますが、妙案が浮かびませんでした。あたしの炎と京極さんの風で、あの蟲(ベステート)を成敗するしかなさそうです」

それはわかっている。

俺たちは頷く。

それしか方法はないだろう。

直球勝負の真っ向勝負だが、それしか手はない。

なにか作戦を立てるにしても、そんな名案が浮かぶという事がない。

「そうですね」

俺がどこまで頑張れるかだ。ヒナゲシさんの力は、充分だろう。ただ、相手が吹雪の中という事で、不利な状況になっている。それを、俺がどこまで補えるかだろう。

すぐに使いこなせるとは思ってなかったけど、今はそうだったらいいなと思う。

漫画だとさ、なにかのきっかけで覚醒して、凄い力が使えるようになったりするのにな……。

それが簡単にできれば、こんなに苦労しないんだけど。

もっとも、そんな覚醒するのって、特別な存在だよな。

……って、俺もある意味じゃそういう存在か。

どのみち、そういうものに縋ってもしようがない。できないものはできない。すぐにできるようになるものでもない。

今ある手駒で、どういう風にするかを考えるべきだろう。

俺が持っている力で、どういう事ができるだろう。

ヒナゲシさんたちの蟲(ベステート)を倒した時みたいに、ヒナゲシさんの炎を大きくさせる事はできるだろうけど、それでいいんだろうか。あの吹雪の中で、炎はどこまで突破できるんだろう。その炎を、俺はどれだけサポートできるんだろう。

「トールちゃん、頑張ってね」

「ああ、やってやるさ。だけど、キヨカも手伝ってくれよな」

……ん？

すぐに返事がなかったのがキヨカを見ると、目をうるうるとさせていた。

どうしたんだよ。

「……………うん、頑張るよ」

なんだったんだろうな。まあ、やる気だしいいんだけど。

「それでは、このままでは蟲(ベステート)の動きに対応できない場合がございますので、拠点を設定せずに移動という事で宜しいでしょうか？」

その提案に、俺たちは頷く。

このまま、ここをホームにして探すよりも、常に移動していく方がいいだろう。実際、あの時もここからは、結構離れていた場所だった。

「少し大変な行軍になるかと思いますが、大丈夫ですか？」

リュウドウさんの心配は尤もだ。厳しい修行を積んできた二人とは違って、俺たちは甘ちゃんだ。ただの若造にすぎない。もっとも、単純に年齢だけだとほぼ一緒だけど。それだからこそ、積み重ねてきたものが違いすぎる。

「なんとか頑張ります」

「私も」

俺たちは視線を交わして、お互いを励ます。

「そうね。無理でもしないといけない事があるものね。それが、あたしたち四護の使命なのだから」

四護の使命。

ついこの前まで、俺たちには知る事もなかった事だ。

この前初めて知った事だし、この旅に出て、初めて実感する事ができた。……いや、まだ実感できていないのかもしれない。徐々に実感できるようになってきている途中なのかもしれない。

それくらい、俺たちの生活からは縁遠かったものだ。

そもそも、この時代に「使命、なんてものを実感して生活している人なんているのだろうか。

「頑張ろうね、トールちゃん」

「ああ」

俺たちは、本気で――比喻じゃなくて、死ぬ気でしないとイケないんだらうな。

死と隣り合わせの旅だけど。

「それでは、準備が整い次第、出立いたしましょう」

日が暮れるまで探したが、なにも見つける事ができなかった。

「それにしても、広いよね……」

野営の準備をしていると、キヨカが周囲を見回して呟く。

「そうだな。広いよな」

真っ直ぐではなく、ジグザグに走っていたが、それでも今まで拠点にしていた場所からは、結構離れた場所まで来ている。それでも、景色は一向に変わる事なく、どこまでも雪原が広がっている。

この世界は、こればかりなんだろうか。

この雪が蟲(ベステート)の影響だとすれば、本来はどんな姿をしているんだろう。それとも、蟲(ベステート)は関係なく元々こういう世界なんだろうか。

雪が覆い尽くしている世界は、ある意味では死の世界だ。生き物がいないわけではないが、活動しているようなイメージがない。

それでも、きちんと生命の営みが行われているのだから不思議だ。

日が暮れ始めると早く、すぐに真っ暗になる。

「見つからなかったね」

「ああ、そうだな」

正直、残念ではある。だけど、すぐに見つかるようなもんじゃないもんな。

「成果は時間が必要なものよ。落胆せずに、明日も探索を続けましょう」

「そうですね」

ヒナゲシさんに言われるまでもなく、そのつもりだ。初日で諦めたり残念に思ったりしてられない。だが、ゆっくりと時間を掛け続けるわけにもいかない。

この世界に来て、既に二週間くらいが経っている。ひとつの世界に二週間近くずっと滞在しているはずだ。つまり、おおよそ一ヶ月半が経っている計算になる。

出発したのが八月一日。単純に考えても、既に元の世界は九月の中旬くらいという事になる。

……………夏休みが終わってしまう。

ゼミは何度も欠席になっているので、巻き返す事は不可能だろう。特にあの教授は、出席には厳しい。

俺もそうだが、キヨカに関しては、既に二学期が始まっているはずだ。出席日数とか大丈夫だろうか。

「なあ、キヨカ」

どうしても気になったので声を掛ける。留年の危機はお互い様だが、キヨカの場合は受験もあるだろうし、余計に重要なはずだ。

「ん？ どうしたの？」

平和そうな顔だな……。

「なあ、受験ってどうするつもりなんだ？」

「どうしたの、突然」

まあ、突然ではあるな。しかも、今の状況ですのような会話じゃない。

「なんとなくな」

俺もどうしてこんな話をしているんだろうな。自分でも不思議だ。

「そうだね……」

しばらく考えて、

「どうしようかな。勉強が遅れまくってるもんね。なんなら、トールちゃんが教えてくれる？」

「悪いが、無理だな」

俺だってなんとかしてやりたいし、できるなら教えてやってもいいのだが、それは難しいだろうな。

決して勉強ができないわけじゃないけど、得意ってわけじゃない。それに、教えるとなると、完全に理解していないと無理だろう。

友達でも家庭教師のバイトをしてるヤツがいるが、よくできるな……と思う。成績は俺とあまり変わらないか、教科によっては俺の方がいいのもあるなけどな。それでも、俺には到底できるとは思えない。やっぱり、そういう才能なんだろうか。

「ケチ」

「そういうんじゃないっての。教えるのは、できないだろうな……って」

「そうだね。トールちゃん、なんにも知らないもんね」

なんだろうな、莫迦(ばか)にしたような言い方だな。

「そんな事ないだろうが。ちゃんと大学行ってるし、成績だってそこそこなんだぞ」

「そんな知識、適当じゃないの？ どうせ、受験だってマークシートでしょ？ 記述がないテストなんて、適当でもなんとなっっちゃうもんね。それなのに……」

と、そこまで言って口を噤(つぐ)む。

「どうしたんだよ」

「このくらいにしておかないとね」

「……………それはそれで失礼だと思わないか」

「そうかもしれないけど。でも、享徳(きょうとく)の乱を知らなかったし、斎藤(さいとう)妙椿(みょうちん)も知らなかったよね」

「……………」

ぎゃふん。

確かに知らなかった。

「だけどな、そんなのあまり授業で習ったりしないだろ」

「そうかな……。でも、有名な事件だし、有名な人だと思うけどな……。歌人としても有名だから、古典でも習うかもよ」

……………知らない俺が悪いのか？

「入試には出ないな。少なくとも、それを知らなくても合格はできる」

「でも、知ってる方がいいよね」

「……………そんなマニアックなのは、歴史が好きなヤツしか知らないっての」

「遠吠えだね」

「……………」

くっ。

なんだろう。

すげえ敗北感。

そもそも、どうしてこうなったんだ？ 最初は、キヨカの受験の心配だったはずなのに、どうして俺がこんな事に……。

「とにかく、受験はなんとかするよ。それまでに戻れたらいいな……」

「俺だって、早く戻りたいよ」

「トールちゃん、ホームシック？」

「違うわっ！」

「……わかってるよ～だ」

べ～、と舌を出されると、怒る気も失せる。

「留年の危機だよね……。私は卒業の危機だし。成績とか、今までの出席日数は問題ないんだけどな……。でも、さすがに三年の後半は無理だろうね。定期試験も受けられないし、欠席続きだもんね……」

お互いにため息を吐く。

「どうしてそういうのを思い出させるかな」

「悪い。俺もふと思い出したんだよな」

自分でもどうしてこんな話をし始めたのか、よくわからなくなっている。

「お二人とも、夕餉(ゆうげ)の準備が整っております」

リュウドウさんが呼んでくれ、俺たちは夕食を食べる事にした。まあ、食べて寝れば忘れるだろう。

今はそれを気にしている場合じゃない。一刻も早く、蟲(ベステート)を封印する事だけを考えよう。

保存食ばかりの夕食だが、これはこれで美味しいんだよな。リュウドウさんの調理が上手なんだろう。飽きさせないのはすごいよな。

俺だって、多少の自炊は一人暮らしのお蔭でできるものの、ここまでは無理だな。

こういう長い旅をしていると、必要なスキルだと思うんだけどな……。

そんな美味しい夕食を終えて、寝床の準備をする。

最初は手間取っていたこの作業も、今では手慣れたものだ。

「じゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

明日こそ、蟲(ベステート)が見つかりますように。

***(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

翌朝も快晴だった。

キラキラと雪に反射して眩しい。スノーゴーグルなんて、当たり前だがないので、目を眇(すが)めるしかない。そのせいで、視力が落ちないか気になるとこだな。

そんなことはさておき、簡単な朝食を終えて片付けを始める。拠点を設定しないので、寝床の設置と撤収を毎日行わなければならない。

これがなかなか重労働だった。

簡易的にはなっているものの、いかんせん雪の上なので、それなりにしっかりさせないといけない。その分、どうしても時間が掛かってしまう。

そんな撤収作業を終えて、橇(そり)で走り出す頃には、既に日が高くなっていた。

雪の反射光が眩しい中、橇(そり)はアテもなく走り続ける。

目印となりそうなものは吹雪しかない。そのため、天候には気を付けなければならない。どこかで吹雪いていそうな場所を見つける必要がある。

なので、俺とヒナゲシさんは、ずっと空を見ている。そして、キヨカは周囲を――主に後方を見ている。前方はリュウドウさんだ。

そんな探索を続けていたが、昼を過ぎてもなにも見つからない。

そうこうしていると、日が傾き始める。

「そろそろ、今晚の寝床を――」

リュウドウさんがそう言って、今日の寝床に適していそうな場所を探そうと口にした時だった。

「あれ！ あそこ！」

キヨカが遠くを指さす。

九時の方角だ。

「なにかあるのか？」

なにか見えるんだろうか。

リュウドウさんが橇(そり)を操作して、キヨカが指した方へ向かう。

「ほら、あれ」

キヨカはどこかを指しているのだが、俺にはなにもわからない。

「あれは……」

「龍堂、急いで」

「畏まりました」

どうやら、リュウドウさんとヒナゲシさんは、キヨカが見つけたものがわかったらしい。

「なあ、なんなんだ？」

「トールちゃん、見えないの？ 視力が落ちてきたんじゃない？」

そうかもしれないな。

つうか、ずっと遠くを見てるんだから、むしろ良くなってそうなんだがな……。いや、空をず

っと見てるから、光で悪くなってるのかもしれないな。直射日光は極力避けてるんだけど。

「ほら、あそこだよ……って、すぐにわかるよ」

「京極様、もうすぐ見えるかと思えますよ」

リュウドウさんに言われると、なにも言えなくなってしまう。

なんだろうな？ キヨカはなにを見つけたんだ？

よくわからないが、すぐにわかるんだろう。リュウドウさんが、意地悪な言い方をするはずもないし。

そして、それはすぐに理解できた。

「あれって……」

結構近付いて、俺は初めてそれを見つける事ができた。

目の前には、集落があった。

しかし、そのほとんどが雪に埋もれており、かろうじて屋根の先端が見える程度だ。人が住んでいるのかもわからない。

しかし、よくこれを見つけたよな。普通わからんぞ。

でも、集落があるって事は、人が住んでいるって事だよな。

「まだ、いるのかな？」

キヨカがぼつりと呟く。

それを聞いてハツとなる。そうか。集落は雪に埋もれているわけだから、既に人がいないかもしれないんだ。

他の場所に引っ越したのか、それとも……………。

「雛罌粟様、いかがされますか？」

「行くしかないでしょ。いいわよね」

確認は必要なかった。俺たちは頷いて答える。

「それでは、向かいます」

櫛(そり)は集落がある方へ向かって走り始める。

「ん？」

走り出すとすぐ、ヒナゲシさんは炎帝をいつでも抜けるように構えている。

「トールちゃん、早く風伯を構えてよ」

なんなんだ？

「ほら、早く」

状況がわからないんだが……。

「早くっ」

とにかく、風伯を構えないといけないらしい。つうか、そんな怒鳴るような事か？

蟲(ベステート)がいるわけでもないだろ。だって、集落がある辺りはいい天気だぞ。吹雪いているようには思えない。どうして、風伯を構えないといけないんだ？

だが、ヒナゲシさんは炎帝を構えたまま、真っ直ぐに前を見ている。

空気がピリピリと張り詰めている。緊張しているような感じとはまた違う。

なんだかよくわからないまま、とりあえず風伯を構える。キヨカがギロリと睨んでいるんだよな……。ホントになんなんだよ。

「皆様方、ご準備は宜しいですか」

「ええ、いつでもいいわよ」

「私も」

ふと見ると、キヨカはフルートを構えていた。

「京極様も宜しいでしょうか？」

「……………えっと、はい」

なんだろう？

また、俺だけ取り残されている感じだな。俺って、やっぱ鈍いんだろうか。

俺はそうは思っていないんだけどな……。会話が少なすぎるだろ。もうちょっとさ、話をして、情報をくれないと、俺はどうしていいのかわからないっての。

とりあえず風伯を構えておく。これでいいんだろ。

橇(そり)は速度を少し落として、集落に近付いていく。

集落には人の気配が感じられない。建物のほとんどが雪に埋まってしまっている。

「誰もいないみた……んぐっ」

んぐぐっ。

「お静かにお願いいたします」

口調は丁寧だが、有無を言わせない空気だ。しかも、結構力が強いんですけど……。

こ、呼吸が……。

「トールちゃん、静かに、だよ」

小声で囁くように言うあたり、キヨカは色々とわかっていたという事だろう。

「京極さん、人の気配があります。襲撃される可能性がありますので、気を張っていて下さい」

……なっ。人の気配？

人がいるってのか？

俺たち以外の人か。

集落があるんだから、人がいても不思議じゃないんだが、目の前の光景が光景だけに、人がいる事が信じられない。

雪の山から、屋根らしいものがわずかに見えているだけで、道もなにもわからないくらいになっているんだぞ。

雪に埋まってしまって、普通なら出る事もままならない。そんな状況で、生活するなんて不可能だ。

いや、もしかして雪の下に、穴を掘って道を造っているんだろうか。それなら納得だ。

俺たちは橇(そり)を降りて、ゆっくりと進んでいく。狼(ルーポ)を先頭に、周囲に気を配りながらの進行だ。

雪はそれほど強くないまでも、はらはらと降り始める。

「気を抜かないようにして下さい」

ヒナゲシさんの声に無言で頷く。

状況が把握しきれていない俺でも、この空気の中だとさすがに緊張してくる。

ゆっくりと近付くにつれ、その度合いは増していく。

集落がすぐ目の前になった時、ヒナゲシさんの炎帝が炎を纏う。

「トールちゃん」

その声を合図に、キヨカが曲を奏でる。

……って、それって静かにしていた意味くないか？

そんな事はお構いなしのようだな。どういう区別なのかわからないが、それはいいみたいで、ヒナゲシさんもリュウドウさんも特に咎めるつもりはないらしい。

まあ、いいけどな。

キヨカの曲を耳にしながら、風伯に集中する。次第に、風伯の周囲の風が渦巻き始め、それが風伯に纏っていく。

よし、いい感じだ。

こちらの準備が整った時、狼(ルーポ)がなにかを察知したのか唸り始める。途端に緊張感がさらに増す。

「御武運を」

えっ？

と、言う間もなく、ヒナゲシさんとリュウドウさんが走る。

俺とキヨカは、その場に取り残されてしまう。

「トールちゃん、気を付けて」

それが聞こえた瞬間、なにかが飛んできたので反射的に避ける。じいさんの特訓の成果かな。感謝。

「またくるよ」

その言葉通り、次々となにかが飛んでくる。

俺とキヨカは、それを避けるだけで精一杯なのだが、ヒナゲシさんとリュウドウさんは、その上で相手に近付いていっている。

すげえな……。

ちゃんと修行すれば、ああいう風になれるんだろうか。

いやいや、今はそれどころじゃないだろ。とにかくこの状況をなんとかしないと。

ひたすら避けていると、次第に動きが慣れてくる。動きにくい雪の上だが、さすがにこの上で生活を続けていたので、それほど不自由しなくなってきた。人間、なんとでもなるもんだな。

キヨカも同じらしく、ひょいひょいと相手をからかうかのように、軽やかな動きで避けていた。

目も慣れてきたお蔭だろうか、投げられてくるものの正体がわかった。

「トールちゃん、雪合戦だね」

どうやらキヨカにも見えているらしい。

「おう。そうだな」

しかし、正体がわかったといっても、易々と当たってやるつもりはない。俺たちの雪合戦の記憶が蘇ってくる。

俺たちの雪合戦には、ほぼ確実に石が入っていた。

つまり、その記憶があるので、簡単に当たるわけにはいかない。どうしても、その可能性が頭をよぎる。

「トールちゃん、ちょっとだけ時間」

「……了解」

言葉は少ないが、今のはわかった。

反撃開始って事だな。

つまり、俺にこの雪玉をなんとかしろって事だよな。その間に、キヨカが反撃の準備をしてくれるって事か。

ふと見ると、ヒナゲシさんとリュウドウさんは、かなり相手側に接近していた。

ヒナゲシさんたちは早々に見切っていたらしく、炎帝の炎を盾にしなが、前に進んでいく。なにせ雪だからな、簡単に溶けてなくなってしまう。

それを見る限り、石は入ってなさそうだな……。まあ、それすらも焼いてしまってたかわからないが。

俺たちもなんとかしないとな。

風伯、頼むぜ。

風伯が纏う風を放って、風の壁を作り上げる。勢いのある雪玉でも、暴風並の風の前ではその勢いを止めざるを得ない。

最初からこうすればよかったかも……と思うが、投げられてくるものがわからなかったからな……。それに、これだってどのくらい続けられるかわからない。

「キヨカ、どうだ？」

「もうちょっとかな。石を入れたいけど、ないからそれは勘弁してよね」

「わかってるよ」

さすがはキヨカだ。本気みたいだな。

雪だらけの中で、地面が見えないんだから、それはしょうがないってものだ。俺だってそこまでするとは思ってなかったし。

「それでも期待してるぞ」

「任せなさい。私を誰だと思ってるんだよ」

「……そうだったな」

視線を交わして確認しあう。こいつに任せれば大丈夫だ。

今までだってそうだったじゃないか。普段は頼りない雰囲気だけど、実はかなり頼りになる。俺なんかよりも、色々とできるはずなんだ。

「キヨカ、ごめんな」

「ん？」

今しか言うタイミングはないと思った。だけど、キヨカには伝わらなかったか。そりゃそうだ。雪玉を作りながら顔を上げる。

「どうしたの、急に」

「いや、俺、どうでもいい事っていうか、どうでもよくないんだけど、なんつうか……」

「どうしたの、トールちゃん」

「とにかくごめん。俺が悪かったんだ」

「ホントにどうしちゃったの？ なにを謝ってるのかなぁ？」

……うっ。こいつ……。

「氷玉、早くしろよ」

「かしこまりましたあ」

にやにやと笑ってやがる。こいつ、わかってるよな。

ったく……。俺ってホントに莫迦みたいじゃないか。

でもまあ、これでいつも通りだな。

「ほら、お待たせだよ」

キヨカは、ほんのりと透き通った一握りの玉を見せてくる。

「待ってたぞ。キヨカ、俺はこのまま壁を作ってる。攻撃は任せた」

「えっと……それなんだけど……」

どうしたんだ？

「トールちゃん、危ないよ」

「すまん、キヨカ」

前にだけ飛ばそうとしてるんだけど、どうにも上手くいかない。

「私にだけは当てないでよ。自分にぶつかるのはいいけどね」

「断る！」

当たってたまるか。

石入りの雪玉とか比べようもないくらい痛いんだぞ、それ。下手すりゃ死ぬぞ。

……って、それを俺はばんばんと飛ばしてるわけだが。

当たったら死ぬかな……。死んじゃうよね。

なんたって、氷の塊だもんな。

できれば、人殺しにはなりたくないな……。

「トールちゃん、ばんばんやったれ」

「……………」

キヨカのヤツ、無責任というかなんというか……。

「はいよ」

とにかく、これって調整が難しいんだよな。でも、向こうからの雪玉は止まったので、攻撃に専念できる。

それもそうだが、キヨカのヤツ、手慣れてきやがったな。氷玉の出来上がりが早くなってきた。

「ほい、ほい」

キヨカが手早く氷玉を投げってくるので、それをレールガンのように放っていく。たまに後ろに飛んだり、あらぬ方向に飛んだりするが、なんとかほとんどは前に飛んでいる。

なかなかいい攻撃だな。

まさかこんな事を考えつくなんてな。キヨカの思考は、俺には理解できない。でも、有効だからすごいんだよな。

そんな攻撃をしばらく続けていると、

「トールちゃん、疲れた。手、冷たい」

「……………」

言葉ないね。

でも、わからなくはない。

俺も、こうして立っているだけなので、足が冷えてきた。正直、手も痺れてきたかも。

「そろそろいいんじゃないか」

「そうだね」

俺たちの意見は一致した。というわけで、今ある分だけで打ち止めだ。

最後の一発を放つと、一気に力が抜ける。

「ふう～、疲れた」

「私も……」

二人して雪の上に座り込む。冷たいのはわかってるんだよ。それでも、疲れたから。

「トールちゃん、お疲れ様」

「キヨカもお疲れ」

雪の上に座って笑いあう。なんだか楽しい。

「それにしても、すげえ事を考えやがるな」

「どうだ、すごいでしょ。アイスクューブ・レールガンだよ」

「……………今、名前を考えたよな」

「そ、そんな事ないよ」

ひょ～と、わざと下手に口笛を吹く。本当はかなり巧いので、わざとこういう事ができるんだが。でも、知らない人が聞いたら、本気で下手だと思うだろうな。

「で、でもさ、カッコいいでしょ。でしょ？」

「悪くはないけど、そのままだよな」

「だからいいんじゃない」

言い切られた。別にいいんだけどな。

「文句ないでしょ」

「ないよ」

ありませんとも。っていうか、言っても無駄なのはわかってるし。

「ねえ、あっちの方でヒナゲシさんたちが」

「ん？」

キヨカが指す方を見ると、少し離れた場所にいたらしいヒナゲシさんたちが、集落の方へ向かって行くのが見えた。

「あれって、もしかして……」

「きっとそうだね」

「だよな……」

俺たちの氷から避難してたんだよな。

確かにどこに飛ぶかわからないものだったしな……。周囲に被害がありまくりだったよな。ちょっと反省。

「私たちも行った方がいいよね」

「だろうな」

「でも、ちょっと休んでたいかも」

「……………同感」

ヒナゲシさんたちには悪いが、俺たちはしばらく動けそうにない。鍛えてるあの人たちから見れば、なんて軟弱だと思うだろうけど、俺たちはただの学生だったんだ。特に鍛えていたわけじゃない。そこは大目に見て欲しいな。

***(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

そうして休んでいると、集落の方からはなにか騒ぎのようなものが。そりゃ、狼(ルーポ)のような大きなものが攻めてきたら騒ぐよな。

「大丈夫かな？」

「殺されたりはしないだろ」

「それって、どっちの心配かな？」

「キヨカと一緒にだよ。あの集落の人たち」

そう言うと、キヨカは、だよねえ〜、と笑う。

騒ぎは少しで、しばらくすると落ち着いてきた。

「大丈夫そうだよな」

「大丈夫だよね」

いくらなんでも、ヒナゲシさんたちが殺めるとは思えないけど、一応は戦国時代の人だからな……。イメージでしかないけど、その辺は大丈夫だよな。

俺もだけど、この刀はあくまでも蟲(ベステート)相手のもので、人を傷つけるものじゃない。

いや、普通に斬る事もできるんだけど、心構えていうか、気持ちの問題として。

「ちょっと心配かも」

「いや、大丈夫だろ」

それは自分にも言い聞かせている感じだな。

「そろそろ行こうか」

「そうだな」

俺たちは腰を上げる。冷たかった。

とりあえず、もう攻撃はない。その辺は安心していいだろう。

それでも、万が一を考えて、風伯は抜いたままにしておく。

特に荒れている様子はないし、なにかが燃えていたりする様子はない。所々壊れているのは、(俺だよな……)

あのアイスクューブ・レールガンの結果だろう。

雪に穴があいていたり、屋根が壊れているのは――主に後者は、罪悪感はある。

「思ったより、すごい事になってるね。でも、しょうがないよね」

しょうがない――それで割り切れるものだろうか。

そりゃ、向こうも攻撃してきたわけだけど、それにしたって、威力は断然こっちが上だっただろ。

雪玉相手に氷玉だ。しかも、こっちは風伯の風の力で速度が尋常じゃない。破壊力もすごい事になってるだろう。

それを踏まえると、大人げないというか、過剰防衛っていうか……。

「トールちゃん、こういうのは大きいも小さいもないよ。攻撃があったかなかったか。そうしないと。相手に合わせて基準をずらしちゃダメだよ」

「そうかもしれないけどさ……」

「そうだったらそうなの。グダグダ考えない。わかった？」

「……………ああ」

そんなこんなで、説教まがいの事をされていると、ヒナゲシさんとリュウドウさんを見つけた。狼(ルーポ)はいないようだ。

「ヒナゲシさん、リュウドウさん」

キヨカが手を挙げて駆け寄る。俺もそれに続く。

「遠野さん、京極さん」

「すみません、遅くなってしまって」

「お疲れ様でございました。お二人のお蔭で、一気に鎮圧する事ができました」

鎮圧って……。

確かにあの攻撃はちょっとどうかと思ったけどね。

「大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫よ。誰も傷つけていないわ。あたしたちもあなたたちも」

それを聞いて安心した。

ヒナゲシさんは、ちゃんとわかってくれたみたいだな。やっばすごい。こういう人たちばかりだから、俺が鈍いってのが特別目立つんだらうな。実生活じゃ、こんな事なかったもん。

「ところでヒナゲシさん、この集落の人たちって……」

キヨカが訊くと、ヒナゲシさんとリュウドウさんは静かに目を閉じる。

「この村の方々は、蟲(ベステート)の被害者でございました。我々は、そのような方々相手に、非道な事をしてしまいました。これは決して赦される所行ではございません。切腹をしてでも詫びたいのですが、我々の使命を考慮するに、実行できず心苦しく思います」

どういう事だ……？ この人たちが蟲(ベステート)の被害者？

っていうか、切腹って……。

この人たちの時代を考えればそうする事もあるんだらうけど、それはどうなんだろう。

でも、使命を考えて踏みとどまってくれてよかったよ。もし、俺たちがここに来る前に自害でもされてたら……。

考えるだにぞっとしないな。

リュウドウさんの場合、思い詰めてすぐに実行しそうだもんな……。

時代のせいにはしたくないけど、融通というか、もうちょっとゆるくてもいいように思うんだけど……。

「ごめんなさい。私にもよくわからないんですけど……」

「そうですね。あたしが順を追って説明します」

どうやら、ヒナゲシさんたちがこの村にやってきた時は、俺の攻撃のせいでかなり疲弊していたらしい。

それ以前に、とても雪の中では生活できないような服装だったそうだ。実際、俺たちの目の前にいる人たちは、かなりの薄着で、見ているだけでも寒い。俺たちの毛布などを貸して、焚き火にあたってもらっている。

それというのも、この地域は年中暖かく、当然ながら雪などというものはなかったそうだ。見た事も聞いた事もないこの不思議なもの――により、この気温の低下によって、多くの同胞が寒さのために命を落としたらしい。

雪というものがなかった上に、低温という気象がない地域のため、防寒という概念や、その準備もなかったわけだ。突然の事に対応できるわけがない。

それがこの数日の出来事だった。

これは、なにかの禍であり、そこへやって来た俺たちを、禍を運ぶ者だと思い、追い返そうとしたらしいのだ。

突然の雪で多くの死者を出し、さらには家屋の崩壊もあり、残されたわずかな現状では、雪玉を遠投機で飛ばすのがやっとだったらしい。

それも、俺のアイスキューブ・レールガンによって、完全に破壊されてしまい、さらには抵抗する意志も打ち砕いてしまったらしい。

ヒナゲシさんたちがここに到着した時には、全てを諦め、死さえも覚悟しているような有様だったようだ。

「ここって、元々は温暖な気候だったんですね」

「それがこうなっちゃうんだ……」

「蟲(ベステート)には、それだけの影響力があったという事ですね。やはり、全てを討滅せねば……」

「でも、数日前まではこうじゃなかったんだよね。私たちがここに来て、二週間くらいだけど、そんな前じゃなくて、ここ数日なんだよね」

キヨカの疑問に、リュウドウさんが、そのようです、と答える。

「もしかして、私たちのせいなんじゃないかな……」

「どういう事だよ」

俺たちのせいってのはよくわからない。そりゃ、俺たちが封印を解いたのは問題だけどさ。でも、キヨカが言ってるのは、そういう根本的なところじゃないよな。

「どういう事かしら？」

「ごめんね。気付かない方がよかったんだけど……」

そう前置きして、

「数日前って、なにがあったか覚えてます？」

その言葉に、三人が同じ事を思い浮かべる。

「正確な日数にもよりますが、おそらくは我々が蟲(ベステート)を討滅した事でしょうか」

俺もそれを考えた。

この数日で、この世界に影響がありそうな事を考えると、それくらいしか思いつかない。

俺とヒナゲシさんで、あの丸くなる蟲(ベステート)を倒した事が関係しているんだろう。

「この世界には、二体の蟲(ベステート)がいたでしょ。だから、それぞれになにか影響してたんだと思う。私たちが探していた蟲(ベステート)は、きっとこの雪の原因なんだと思う。あるはずのない雪を、この世界に降らしてるんだと思う」

「それはあたしも同感ね」

俺もだ。吹雪が蟲(ベステート)がいる場所の目印になる事からも、それは間違いないだろう。この吹雪は蟲(ベステート)の影響だ。

だけど、それだけじゃないんだろうな。

「そして、ヒナゲシさんたちが探していた蟲(ベステート)は、きつとなにか壁を作ってたんじゃないかな」

「どういう……」

質問しかけて気付いた。

そういう事か。

俺たちが探していた蟲(ベステート)は、ヒナゲシさんが探していた蟲(ベステート)が作った壁に閉じこめられたんだ。出れなくなった事と同時に、雪の影響も限定的だった。

しかし、俺たちがその壁を作っていた蟲(ベステート)を倒してしまったせいで、壁によって範囲が小さかった雪の影響が、この集落がある辺りにまで広がってしまったんだ。

「……………我々の責でございますね」

「そうね」

リュウドウさんとヒナゲシさんも、キヨカが言いたい事を理解したようだ。

「でも、どうしようもないでしょ」

そう言ってみるものの、気休めにもならないのはわかっていた。誰もが責任を感じている。

俺たちが、蟲(ベステート)を封じる順番を間違えなければ——もし逆の順番だったら。

そう考えると悔やまれてしょうがない。

俺たちには、蟲(ベステート)がどんな影響を与えるのかわかっていなかった。もちろん、ただの言い訳だし、それで赦されるものじゃない。だけど……だけどだ、俺たちは最善を尽くした——と思っている。そう思いたい。

「この方々に、あたしたちができる事は、一刻も早く蟲(ベステート)を討滅して、この世界を元に戻す事だけね」

それしかないだろう。

それでも、失われた命は戻ってこない。

蟲(ベステート)を封印したからといって、なにもかもがリセットされるわけじゃない。

「なかった事にできないなら、これからを護らないといけないよね」

「雛嚳栗様、遠野様……」

「リュウドウさん、俺だって納得できないっていうか、自分が赦せないけど、なにもできないのも事実です。だから、二人の言う通り、蟲(ベステート)を封印する事だけを考えましょう」

「……………」

リュウドウさんは、自責の念にかられていたが、それでも無言で頷いた。

「行きましょう」

ヒナゲシさんは集落の人たちに背を向ける。

「そうですね」

キヨカもそれに倣う。

ホントに、女ってこういうのが強いよな。割り切れないのは男も女もないのに、そういう事ができる。絶対敵わない。

「リュウドウさん、行きましょう」

「……………はい」

**(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

橇(そり)に乗って、雪原を走り続ける。

みんな、蟲(ベステート)を見つけるのに躍起になっている。

今までが真剣じゃなかったわけじゃないけど、今までとは比べようもないくらい集中している

。

どこだ。どこにいる。

すぐにでも封印してやる。

なにがなんでもだ。

まさか、こんなに影響があるなんて、思ってもいなかった。

わかってなかったんだ。

こうして、目の当たりにして初めて実感する。逆にいえば、実際に経験しないとわからないって事だ。

ちくしょう。

どうにもできなかつたかもしれない。不可抗力かもしれない。それでもなんとかしたいと思うのは、自意識過剰なんだろうか。

俺たちは完璧じゃない。間違いや失敗の連続だ。

それを少しでも克服したいと思うけど、できる事はたかがしれている。

そのできるわずかな事で、なんとかしていくしかないんだ。

「トールちゃん、あそこ」

「どうした？ ……ヒナゲシさん、リュウドウさん」

キヨカがついに吹雪いていそうな場所を発見した。そこには黒い雲がある。全体的に曇っているが、そこだけは違っている。

「雛罌粟様」

「ええ、行くわよ」

それを聞くのを待たずに、橇(そり)は今までにない速度で走る。もちろん、向かうはあの吹雪の中だ。

「京極さん、準備はよろしいですか」

「ええ、もちろん」

ヒナゲシさんに訊かれるまでもなく、既に風伯を抜いている。キヨカもフルートを構えていた

。

「トールちゃん、いくよ」

「頼む」

キヨカが奏でるフルートの旋律を呼び水にして、風伯に風を纏わせる。

「リュウドウさん、狼(ルーポ)を一旦戻してもらえませんか」

「しかし、それでは……」

「試したい事があるんです。お願いします」

「雛罌粟様……」

判断に困り、ヒナゲシさんに助けを求める。支家という立場上、強固な態度はとれない。

「……………京極さん、現状は理解されていますよね」

「もちろんです。だからこそ、試したいんです」

ヒナゲシさんの視線に目を逸らしたくなるけど、今それをするわけにはいかない。

「トールちゃん、本当に大丈夫なの？」

「試したいんだ。一〇〇%じゃない。だけど頼む。やらせてくれ」

キヨカは俺をじっと見て、

「ヒナゲシさん、リュウドウさん、私からもお願いします」

「キヨカ……」

そんな俺たちを見て、ヒナゲシさんはため息を吐く。

「リュウドウ、京極さんに賭けてみましょう」

「畏まりました」

リュウドウさんは、狼(ルーポ)に指示を出し、ゆっくりと橇(そり)が止まる。狼(ルーポ)はリュウドウさんの手の中に戻る。

それを確認すると、俺は後方に移動して風伯を構える。

「いきます」

風を調整して、後方に向かって風を放つ。

その力で、ゆっくりと橇(そり)が進み始める。

「トールちゃん、もしかして……」

「しっかり掴まって下さいよ」

ゆっくりだった風を、徐々に強めていく。それによって、橇(そり)は次第に速度を上げていく。

「うっわあ、すごい、すごい！」

「こんな事が……」

「驚嘆です」

ほんの数秒後には、狼(ルーポ)が牽引していた時よりも速くなっていた。

「トールちゃん、すごいよ」

「京極さんの思考に感嘆します」

「我々では考えも及びませんでした」

褒められ慣れてないので、かなりくすぐったい。だけど、悪い気はしない。

だけど、ここで調子に乗ると大変な事になる。慎重に慎重に。風の強さに気を付ける。

これのお蔭だろうか、早く到着する事ができた。吹雪の手前で一旦止まる。

「京極様、お見事でございます」

「トールちゃん、すごいよ」

「いや、みんなが俺に任せてくれたからだし」

自分でも、これだけ上手くいくとは思ってなかっただけに、マジで驚いている。俺だってやればできるんだよな。

これが自信に繋がってくる。

「いえいえ、京極さんの考えは素晴らしかったです。遠野さんといい京極さんといい、未来の四護にはとても敵いそうもありません」

「俺だって、一か八かだったんですけどね。でも、成功してよかった。これで、早く着けたし、なにより狼(ルーポ)の体力を温存できたでしょ」

「もしかして、トールちゃん……」

「それが目的だったんだけどな。蟲(ベステート)と戦う時、狼(ルーポ)には万全の状態であって欲しかったからな」

「お心遣いいたみいます」

「さあ、ここからは狼(ルーポ)に期待しますよ」

「お任せを」

ゆっくりと橇(そり)を発進させる。

全員が緊張した面持ちで、吹雪の中を突っ走っていく。

本当なら、俺の風でこの吹雪の風もなんとかしたいけど、そんな器用な事はできない。橇(そり)を狼(ルーポ)に任せればできる可能性があるのかもしれないが、蟲(ベステート)の影響であるこの風が相手だと、逆にかき消されてしまう可能性の方が高い。橇(そり)はなんとか走らせられたが、これができる自信はない。

そういうわけで、みんなには吹雪を我慢してもらうしかない。

「見えました」

吹雪の中、ヒナゲシさんがついに蟲(ベステート)を発見した。風を調整して橇(そり)をそちらに向ける。

「ヒナゲシさん、頑張って」

「龍堂、狼(ルーポ)の準備を」

「いつでも」

よし、これが最終決戦だ。っていうか、これで終わらせたい。

逃げられると、また搜索しないといけないし、被害をさらに大きくしてしまうかもしれない。今もそれは拡大中なのかもしれない。

だったらなおさら、俺たちはここで決めないといけないんだ。

「ラストスパート！」

逸る気持ち。それが橇(そり)の速さに繋がる。

「トールちゃん、止まる気あるの？」

「……………あっ」

忘れて……………た。

気付いた時には、蟲(ベステート)に激突していた。

キヨカ、もうちょっと早く教えて欲しかったな……………。

衝突の衝撃で、俺たちはバラバラに吹っ飛んだ。

下が雪でよかった……………。なんとか無事だった。しかも、柔らかい雪だったので、クッションにもなったようだ。

「ててて……………」

「トールちゃん、最低。調子にのりすぎ」

「ってえ〜。すまん、つい……………」

「ご無事ですか」

リュウドウさんが駆け寄ってくる。

「すみませんでした。リュウドウさんとヒナゲシさんは……………」

と、訊いていると、なにかが爆発するような音がしてそっちを見る。

「……………すごいね」

「……………ああ」

ヒナゲシさんは、既に蟲(ベステート)との戦闘を始めていた。その傍らには狼(ルーポ)もいる。どうやら、無事だったみたいだな……………。ってというか、こんな状態なのは、俺たちだけって事だよな。

「すみません。俺たちもすぐ……………」

「はい。助かります」

ヒナゲシさんは、何度も何度も炎の球を放っているけど、やっぱり蟲(ベステート)にはさほどのダメージになっていないみたいだ。

外殻(がいかく)とこの吹雪のせいだろう。

「こうなったら、直接攻撃かな」

風に負けそうになりながらも、なんとか蟲(ベステート)に近付いていく。

「京極さん」

「お待たせしました。俺も戦います」

「お願いします」

近付くと、やっぱりでかいな……………。

今回の蟲(ベステート)の両手には、大きな鎌のようなものがある。これに注意した方がいいだろうな。

その鎌が怖いけど、動きがあまり早くないのが救いだらう。それでも、決して簡単に倒せる相手じゃない。

狼(ルーポ)が飛びかかるが、それを鎌で防がれてしまう。

「狼(ルーポ)！」

ヒナゲシさんは、視線だけに向け、すぐに蟲(ベステート)を見る。

「京極さん、風をお願いします」

「わかりました」

きっと、丸くなる蟲(ベステート)を倒した時と同じ事をするんだろう。

俺は風伯に集中して、風を渦巻かせて放つ。それに合わせるように、ヒナゲシさんが炎を放つ

。

こうしてできあがった炎の渦が、蟲(ベステート)に襲いかかる。

(どうだ！ これなら……)

気分的なものかもしれないが、この前よりも強くなっている気がする。

修行の成果なんて、こんなすぐに出るわけないんだけど。気持ちの問題だろうな。

炎が蟲(ベステート)を包み込むが、吹雪がそれを相殺するかのよう炎の威力を弱めている。

「くっ、やっぱり無理なのか？」

「諦めず継続しましょう」

「……そうですね」

ここで諦めるわけにはいかないんだ。

だって、これで終わらせるって決めただろ。

余力なんて考えるな。全力を出し切るんだ！

「うおおおおっ！」

俺の力を全て出し切るつもりで、俺自身が飛び出すようなつもりで風を放つ。

俺の風が吹雪を相殺し、さらに炎の威力を増し、蟲(ベステート)はその熱さに悶えるように倒れる。

「やった……」

蟲(ベステート)が倒れると同時に、吹雪がやんだ。

「やった……」

同時に、俺も立ってられなくなって、雪に膝をつく。

「京極さん、まだです」

えっ？

終わったと思ったのに、ヒナゲシさんがそんな事を言う。

もう終わったでしょ。

だって、蟲(ベステート)は雪に横たわるようにしてるし。

「……なっ！」

確かに蟲(ベステート)は雪の上に横たわっていた。

しかし次の瞬間、蟲(ベステート)は背中にあっという間に翅を使って飛んだ。

そんな……。

蟲(ベステート)の外殻(がいかく)からは、煙が上がっているがそれだけで、ダメージはあまりないようだ。

どうなってんだよ。

「避けてっ！」

茫然としていると、ヒナゲシさんに突き飛ばされた。

「うわっ！」

と、俺が今までいた場所に、蟲(ベステート)の鎌が深々と突き刺さっていた。

どうなってるんだ？

っていうか、俺ってもしかして串刺しになるところだったのか。

あまりの事に思考が追いつかない。

俺の風とヒナゲシさんの炎で、蟲(ベステート)を倒したと思ったのに、どうしてこんな事になってるんだ？

「京極さん、立って下さい」

ヒナゲシさんに抱えられるようにして立つ。

「うおっ」

走り出すと、その場所その場所に鎌が刺さる。

やばい。

これはマジでやばい。

なんとしても逃げないと。

今までの遅かった動きが嘘のようだ。翅を使って飛んだ蟲(ベステート)は、今までからは考えられない動きをしてくる。

蟲(ベステート)は俺とヒナゲシさんを確実に狙ってくる。

足場がどうのとか、そんなのを言い訳にしていると、確実に鎌の餌食(えじき)になってしまう。必死に逃げるしかない。

「体勢を立て直さない」と

俺だって仕切直したいけど、このままだとそんな余裕は、とてもじゃないが考えられない。

今はとにかく逃げるだけだ。

「狼(ルーポ)！」

リュウドウさんの声で、狼(ルーポ)が蟲(ベステート)に襲いかかる。

――が、蟲(ベステート)はそれをかわしてしまう。

飛んでいる相手に、地上からの跳躍では不利なのは当然だ。

雪の上に着地した狼(ルーポ)目掛けて、蟲(ベステート)の鎌が襲いかかる。

「狼(ルーポ)っ！」

「いやあっ！」

それは、狼(ルーポ)が着地したのとあまりに同時すぎた。

「ルーちゃんっ！」

「狼(ルーポ)っ！」

蟲(ベステート)の鎌が狼(ルーポ)の体に刺さる。

見たくない光景だった。

信じられない光景だった。

「「狼(ルーポ)！」」

リュウドウさんとヒナゲシさんが駆け寄っていく。

「危ないっ！」

そんな二人に向けて、蟲(ベステート)は鎌を振り下ろそうとしていた。

「間に合えっ！」

とにかく体が動いた。

反射的だった。

風伯を振って風を起こす。しかし、それは蟲(ベステート)とは違う方向へ。

これでいいんだ。

この風は蟲(ベステート)を倒すためのものじゃない。

風は俺が狙った通り、ヒナゲシさんとリュウドウさん、そして狼(ルーポ)を蟲(ベステート)の間に合から遠ざける。

少々どころじゃないくらい荒っぽいけど、そうでもしないと、ヒナゲシさんとリュウドウさんも、鎌の餌食になってしまっていただろう。二人には、手荒な真似をした事を後で謝ればいい。

「トールちゃん」

キヨカが駆け寄ってくる。

「やっぱり、アーちゃんを……」

「いや、そうすると狼(ルーポ)の二の舞だろう。そもそも、蜘蛛(アラネーオ)には、この環境は不利すぎる」

「そうだけど……」

キヨカもそんな事はわかっている。わかっているけど、なんとかしたいと思うんだ。

それは俺だって同じだ。なんとかしたい。

しかし、俺たちの今の力じゃ、できる事には限界がある。それは、この状況を打破するには足りない。

蟲(ベステート)は倒れている狼(ルーポ)をさらに狙っている。

「ちくしょう」

このままだと、狼(ルーポ)は完全に……。それに、ヒナゲシさんとリュウドウさんも犠牲になってしまう。

「どうすればいい。どうすればいいんだ」

なにか手はないか。また、風で吹っ飛ばすしかないのか。

いい手が思い浮かばないでいる間にも、蟲(ベステート)の鎌がヒナゲシさんたちを襲う。

その一瞬前に、とりあえず風で移動させる。もっとも、移動なんて優しいものじゃないけど。

「トールちゃん、ちょっと考えたんだけどさ……」

キヨカが耳打ちをしてくる。別に、ひそひそ話をする理由はないけどな。

「……なるほど。まあ、試してみる価値はあるかもしれないな」

雪の中だと炎はその威力を弱められてしまう。

風も吹雪の前では無力だ。

だとしたら、他になにか……。それ以外の力を使わないと勝ち目はない。

かといって、俺たちにできる事はほとんどない。

俺は風だけだし、ヒナゲシさんは炎だ。

キヨカの蜘蛛(アラネーオ)はここでは動けない。リュウドウさんの狼(ルーポ)も今は動く事ができない。

だとしたら、俺の風とヒナゲシさんの炎でなにかをしなければならない。

だが、炎の渦は通用しなかった。

俺もなにかないかと考えたが、結局なにも浮かばなかった。

しかし、キヨカはその中にひとつの回答を見つけた。

俺の風とヒナゲシさんの炎を、全く別の力にする方法。キヨカがそれを戸惑いながらも伝えてくれる。

「どうかな？」

不安そうなのはよくわかる。

「それにしても、よくそんなのを思いついたな」

まずは感心した。

確かに理論上は可能だろう。

問題は机上の空論になる可能性が高いという事だ。理論通りになるだろうか。

だけど、今はそれを考える時じゃない。

考えるよりも行動だ。

「ヒナゲシさん」

俺はこの作戦を伝えるために、ヒナゲシさんたちがいる場所に駆け寄る。

「くっ」

ヒナゲシさんたちにまた蟲(ベステート)の鎌が……。

「お前は邪魔だあっ！」

今度は蟲(ベステート)に向かって風を放つ！

飛んでいる蟲(ベステート)は、思ったよりも風の影響を受けたようで、体勢を立て直すために一度離れていく。

「今しかない」

できる限りの最速でヒナゲシさんに駆け寄る。

ヒナゲシさんとリュウドウさんは、狼(ルーポ)に覆い被さるようにして泣いている。

こんな状態で大丈夫だろうか。

っていうか、こんな状態の相手に声を掛けるなんてできるだろうか。

だけど、今はするしかないんだ。

狼(ルーポ)のためにも、今は行動あるのみ。

意を決して、話し掛ける。

「ヒナゲシさん、力を貸して下さい」

今はヒナゲシさんを気遣っている余裕はない。どれだけ傷付けようとも、構ってられない。

「……………」

魂が抜けたように茫然としているヒナゲシさんの腕を掴み、無理矢理立たせる。普段なら、リュウドウさんに阻止されそうな事なのだが、さすがのリュウドウさんも今はそれすらもできないようだ。

「ヒナゲシさん、蟲(ベステート)を倒すために、封印するために、力を貸して下さい」

しかし、目の焦点が合っていないような状態だ。完全に心を折られてしまっている。

「狼(ルーポ)の仇をうたなくていいんですか」

どうすればヒナゲシさんを……。

「トールちゃん、上！」

蟲(ベステート)は体勢を立て直し、俺たちを狙っていた。

「くっ」

ヒナゲシさんを掴んでいた手を放す。とさりとヒナゲシさんが雪の上に倒れるが、それどころじゃない。

風伯を構えて迎えうとうとする。本当なら、風の力で防ぎたいが、もう間に合いそうもない。刀身で直接受けるしかない。

できるか……？

剣道とはまた違うんだよな。剣術もじいさんに教えてもらっているし、ヒナゲシさんにも稽古をつけてもらった。でも、やっぱり蟲(ベステート)の攻撃は別だろ。

やるしかない。

蟲(ベステート)の鎌にだけ集中する。

さすがに、奇妙な動きはしないだろ。

振り下ろされる鎌だけを見るんだ。

「……………」

くるっ！

「かっ」

なんとか刀身で受ける事だけはできたが、

「……………くぁ」

あり得ない力で、そのまま吹っ飛ばされてしまう。

宙を舞い、雪の上に叩きつけられる。

「がっ」

降り積もったばかりで柔らかくなかったら、本当にどうなっていたかわからない。ずっぽりと雪に埋まる。

俺を吹っ飛ばした蟲(ベステート)は、再び狼(ルーポ)に襲いかかろうとしている。

「くそっ」

この状況だと、風伯を振れない。ヒナゲシさんはあんなだし、リュウドウさんも……。キヨカには防ぐ手だてがない。

このままだと、狼(ルーポ)はもちろんヒナゲシさんとリュウドウさんも危ない。  
ちくしょう。終わりだ。  
そんな光景を見たくなくて目を瞑(つむ)る。

***(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

「邪魔よ」

凜とした声。

啞然(あぜん)とした。

ヒナゲシさんは、振り向きもせずに炎帝を振り抜き、蟲(ベステート)の鎌を受け、さらにそのまま斬り裂いた。

鎌の斬り口からは、炎があがるが、それはすぐに消えてしまった。

「……………すげえ」

信じられない光景だった。まさか、蟲(ベステート)を見ないで斬るなんて……。

鎌を斬られた蟲(ベステート)は、空高く飛び上がる。

「ヒナゲシさん、大丈夫ですか」

安全だと判断したのか、キヨカが駆け寄っていく。俺も雪から這い出て駆け寄る。

「ヒナゲシさん……」

と、声を掛けようとして、背筋が凍った。

な、なんだ……。

雰囲気冷たい。周囲の空気が重く冷たい。凍てつきそうな感じだ。

キヨカも声を掛けられずにいた。

「赦(ゆる)さない」

ヒナゲシさんは天を仰ぎ見る。ちらりと見えた視線が、とてもじゃないが見ていられなかった。鋭く細く、その視線だけで怯んでしまう。まさに突き刺すような視線だ。

「トールちゃん、どうしたらいいかな」

「……………無理。キヨカにできないのに、俺ができるわけないだろ」

「そうだね」

即答で肯定された。これはこれでムカつくな。でも、事実だからな……。

「ちょっと、私でも怖いよ……」

「だ、だよなあ」

俺がチキンだからってわけでもない。この状況で声を掛けられるヤツがいたら、是非とも教えてもらいたいね。

「トールちゃん」

俺たちがどうしていいのかわからずいる間にも、蟲(ベステート)は体勢を立て直し、再び襲いかかってきた。

っていうか、蟲(ベステート)も懲りないというか、諦めが悪いというか……。まあ、逃げられでもしたら大変なので、こうして襲いかかってきてくれる方がいいのかもしれないけど。

「くっ」

風伯(ふうはく)を抜いて構えるが、その前にヒナゲシさんが動いていた。

「あっ……」

俺たちは啞然としたままそれを見ていた。

ヒナゲシさんは跳躍すると、炎帝(えんてい)で蟲(ベステート)を斬りつける。

炎を纏(まと)っていなかったはずの炎帝だが、その切り口からは炎があがっている。

「どうなってやがるんだ」

「……………もしかして、炎帝ってものすごく熱いの？」

炎だけかと思っていたが、その刀身は超高温なのだろうか。

そうなら納得できる。

「ねえ、もしそうなら、私が考えた事……」

「そうだな」

キヨカが思いついた事を実行するには、炎よりも熱の方が効率的かもしれない。どっちも一緒かもしれないけど、気分的にな。

このままなら、その作戦を実行しなくても、なんとかなってしまうんじゃないかって気もしてるんだよな。今のヒナゲシさんなら、蟲(ベステート)を行動不能にできそうだ。

だが、そう簡単にはいかないらしい。

ヒナゲシさんの攻撃は、確実に当たっているのだが、蟲(ベステート)にとっては効果的ではないらしい。平然と空を飛んでいる。

どうなってるんだよ。

確かに炎帝に斬られ、切り口からは炎があがっているのだが、蟲(ベステート)は平然と攻撃を続けてくる。

……その切り口が浅いせいなのか。

炎帝では外殻までしか斬れずに、本体に届いていないって事なのか。

そう考えるしかない。

だとすれば、やはりキヨカが考えた作戦を実行するしかない。その作戦なら、外殻を貫いてダメージを与えられるはずだ。

「ヒナゲシさん！」

声を掛けづらいとか言ってる場合じゃない。このまま続ければ、ヒナゲシさんは体力を消耗して、いずれ動けなくなってしまう。

そうなれば、この作戦が実行できないばかりか、蟲(ベステート)の標的になってしまう。

「ヒナゲシさん！ 落ち着いて下さい！」

どう声を掛ければいいのかわからなかったが、とりあえず気を引ければいいだろう。

「ヒナゲシさん！」

何度目かの呼びかけで、ようやくヒナゲシさんがこっちを向いた。

「京極(きょうごく)さん、今はあたしの望み通りにさせて下さい」

「……………」

怖っ。

低いドスの利いた声だった。

その声に思わず身震いするが、それでも声を掛けないといけない。ああ、なんか胃が痛い。心

臓もバクバクいってる。冷や汗もダラダラだ。

面接なんか比じゃない緊張だぞ。

「ヒナゲシさん、落ち着いて下さい」

「……いくら京極さんでも、こればかりは譲れません」

本当に怖いんだが。この人が敵じゃなくてよかった。

足が震えるが、なんとか手で押さえる。

ああ、怖すぎるよ……。

すぐにでも逃げ出したい。

少し離れた場所からは、キヨカが無言で、がんばっ、とエールを送ってくれている。

「……………よし」

深呼吸。

また深呼吸。

またまた深呼吸。

そして、声を出す。

「ヒナゲシさん、蟲(ベステート)を倒すために、力を貸して下さい」

その声にヒナゲシさんが止まる。

そこへ蟲(ベステート)の鎌が。

「あっ」

しまった……。タイミングが悪かった。

そう思ったが、ヒナゲシさんはその鎌を炎帝で受け流した。やっぱりこの人は、俺とは格が違う。

「蟲(ベステート)はあたしが倒します」

「ヒナゲシさんだけでできますか？」

ギロリと睨まれる。

うわっ、言い方がマズかったか。

「……………それでも、狼(ルーポ)の仇はあたしが討ちます」

完全に意地になってる感じだな。気持ちはすっげえわかるんだけど。こういう状況だったら、俺だってそうしてるだろう。通用しないとわかっていても、それでも諦める事ができない。ただ繰り返す。ただ足掻く。それだけだ。

「気持ちはわかります。だからこそ、協力しましょう」

「あなたたちに本当にわかるのですか？」

静かな声だった。

「平和な世界で生活し、争いとは無縁だったあなたたちに、あたしの気持ちはわかるのでしょうか」

……それを言われるとな……………。

その間にも、蟲(ベステート)は空からの攻撃を続けている。ヒナゲシさんは、そちらに集中しながら会話してくれてるんだから、本当にすごいよ。

確かに、俺たちは平和な世界だよ。それは俺たちの周囲だけで、世界規模だと平和なんてないのかもしれない。どこかで紛争は続いているし、小さな争いなんて日常茶飯事だろう。

世界のどこかで誰かが飢え、誰かが殺され、誰かが踏みにじられている。

世界ってのはそんなものだ。

自分の隣が平穏ならそれでいい。広い視野なんて持てるはずがない。

そんな世界に比べれば、ヒナゲシさんが生きている時代は、平和とはほど遠いだろう。

室町幕府ができて、一見すれば平和になったかもしれないが、既に時代は終盤だ。安土桃山時代になろうとしている。本格的な戦国時代になろうとしている。

確かに日常に戦争があるんだろう。平和とは言えないだろう。

だから、それを前提にされたら、俺たちはなにも言えない。

その時代からすれば、俺たちは平和な状況で、護られて生活しているわけだ。明日の食べ物の心配をしなくてもいい時代だ。

恵まれている。

ああ、恵まれているともさ。

だからどうしたってんだ。

そんな世界だからって、誰かが傷付けられた時の悔しさがわからないなんて、どうして言い切れるんだ。

そんなの、どんな世界だって、どんな時代だって、誰だって変わるわけじゃないか。

「確かに俺たちは平和な世界を生きていたかもしれませんが、だけど、だからって気持ちが変わらないなんて、それは横暴です。その発言は、訂正してもらいます」

言い返してやった。

そうだよ。言われっぱなしでいられるか。

「……………それでは、なにか策があるとでも？」

どうやら、話を聞く気にはなっただらしい。それでいい。

「ええ、ありますよ。とっておきの作戦が」

成功するかどうかはわからないが、それを今告げる必要はないだろう。ここははったりでも、とにかく協力を得る事が重要だ。

「……その策を教えてくださいませう」

よしっ。

これでいい。

「じゃあ、力を貸して下さい」

「わかりました」

ヒナゲシさんは、蟲(ベステート)にゼロ距離で炎を放つ。

その炎は、わずかに蟲(ベステート)の翅を焦がした。

蟲(ベステート)は翅を守るように、離れていく。

これで、少しは時間が稼げるかもしれない。この作戦には、ちょっと準備が必要だ。その時間を、できれば狼(ルーポ)に作ってもらえたら楽なのかもしれないが、それは元々無理だとわかっ

ている。

「キヨカ、説明を頼む」

「……了解」

***(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.***

俺が蟲(ベステート)をどうにかするしかない。キヨカが説明している間はもちろん、実際の作戦中もそうなる。

「……………そのような事が、本当に可能なのですか？」

話を聞いたヒナゲシさんは、夢物語でも聞いたような顔をしている。

科学的な根拠なんて、ヒナゲシさんの時代ならわからないだろう。

「そういうものなんです。私とトールちゃんを信じて下さい」

「……わかりました。あなた方の策は、これまでも奇想天外なものでしたが、どれも効果的なものでした。ですので、全てお任せします」

どうやら話がまとまったらしい。

「トールちゃん、準備をお願い」

「了解」

蟲(ベステート)はさっきのヒナゲシさんの攻撃のお蔭で、すぐに攻撃を仕掛けてこない。

俺は風伯の力で、大きな風の球を作る。水分も必要なので、積もっている雪も巻き込む。

その周囲を覆うように、風の膜を作る。

……………イメージでなんとかできるといっても、これはなかなか難しいぞ。

すっげえ集中力が必要だ。

四苦八苦して、ようやく巨大な球ができあがった。大きさにすれば、直径二〇メートルといったところか。本当は、もっと巨大なものもいいんだろうけど、これが限界だ。

これを維持したまま、蟲(ベステート)の攻撃なんて受けれるのか？

話を聞いた時は、なんとかできそうだったけど、これはなかなか難しいぞ。想像通りにはいかない。

ちょっとでも気を抜くと、風の球を維持できなくなる。この風の球は、この作戦の要だ。そして、ヒナゲシさんの炎帝の熱も、この作戦には欠かせない。

早くしてくれ。

そう願っても、どうしようもない事はある。この冷えきった空気を、暖めるには時間が必要だ。それも、かなりの規模の空気だ。俺にできるのは、その暖めた空気を纏めておく事と、外気で冷やさないようにする事だ。そのためにも、これを維持し続けなければならない。

「くっ」

そろそろ苦しいかも。

でも、目の前にある球は、徐々に暖まっている事が視認できる。中に取り込んだ雪が水蒸気となり、なかが曇ってきている。それと同時に、空気が熱膨張して、さらに大きくなろうとしている。

さすがにその自然の力に逆らう事はできそうにない。

「キヨカ、ちょっと広げるぞ」

「えっ？ どうしたの？」

まあ、キヨカにはこの状況を体感できないから、わかりにくいかもな。

「熱膨張で空気がさ……」

「そうだね。これからもうちょっと膨らむよね。……でも、トールちゃん大丈夫？」

「大丈夫じゃなくても、なんとかするしかないだろ」

「さっすがだね」

「情けない俺でも、やれるだけはやってやるさ」

「頼もしいよ、トールちゃん。できるだけいいから、頑張ってね」

「了解だ」

意識を集中したまま、空気の球を押さえる力を少し緩める。しかし、力を抜きすぎると、球を維持できなくなって弾けてしまう。この加減が難しい。

「くっ……」

「トールちゃん、頑張って。今のところ蟲(ベステート)は大丈夫だよ」

サンキュな、キヨカ。正直、いっぱいいっぱいすぎて、蟲(ベステート)にまで気を回せてなかったからな。もし蟲(ベステート)が攻撃してきたら、俺はなにもできなかつたろうし。つうか、攻撃してくるなよ。今されたら、この球を維持するためになにもせず受けるか、この球を諦めて攻撃を受け流すか……どっちかだな。もっとも、前者だと俺は生きていられるかわからないから、後者を選ばせてもらうけどな。

あとどのくらいだろうな。

俺もキヨカも、どこまで暖めればいいのかわかってないんだけどな。

徐々に内側からの力が強くなってくる。それを程良く纏めるのが難しい。

球の中は曇っていてよく見えないが、そろそろ飽和状態じゃないだろうか。

「キヨカ、そろそろどうだ？」

っていうか、そろそろなんとかしないと、俺が耐えられない。

「……う～ん、もうちょっとかな」

「……マジか」

「ちゃんとしないと、中途半端だと失敗しちゃうもん」

「それはわかるけどさ……」

「頑張りましょう、京極さん」

「………はい」

ヒナゲシさんは、ずっと熱を発しているだけだからな……。炎帝を構えているだけと、こうして風を制御するのは、労力が違いすぎるだろ。

「もっと熱を送ります」

「お願いします、ヒナゲシさん。トールちゃんも、もうちょっとだけ我慢して」

「……りよ～かい」

もうちょっと……ね。それが長いんだよな。だけど、ここまでしたんだから、途中で投げ出すわけにはいかないだろ。

「トールちゃん、今だよ！」

「……お、おう！」

キヨカの判断を信じるぜ。この作戦、実現できるかは神頼みだけだな。

「よっしゃ！ いっけえっ！」

暖めて風の球を上空に向かって飛ばす。薄黒く曇った球は、どんどん上昇していく。っていうか、いつの間にか白から薄い黒になってたんだな。

「トールちゃん、そのまま上昇気流を。ヒナゲシさんも、まだまだ続けて下さい」

そう——これで終わりじゃない。まだまだ続くんだ。

今度は、ひたすら風を上に向かって送るだけ。さっきまでと比べたら、幾分か余裕がある。

ヒナゲシさんは、俺が送る風を暖め続ける。さっきからこればっかなんだが、これが重要な事なんだよな。

風は雪を巻き上げるようにしながら、上空に向かっていく。一緒に巻き上がっていく雪は、炎帝の熱ですぐに溶けてしまう。

だけどこれでいいんだ。

「トールちゃん、もっとだよ。もっともっと」

「わかってるよ。だけど、これが限界だっつの」

「しょうがないな……。ヒナゲシさん、もっと熱くできますか？」

「可能よ」

「じゃあ、お願いします」

「了解」

……はあ。なんだかやっぱり情けないな。俺としては、限界ギリギリだ。

それを踏まえた上でのキヨカの判断は的確だ。

俺にこれ以上の期待はできないので、自然の力で同じ事をするつもりだ。俺が上昇気流を作らなくても、空気を暖めればそれは上昇していく。

「トールちゃん！」

なんだ……って、マジかよ。

キヨカの声で蟲(ベステート)の攻撃に気付けた。

「ヒナゲシさんはそのままお願いします。キヨカ、ちょっと離れてろ」

「わかったよ」

蟲(ベステート)は俺たちの方へ飛んでくる。

「京極さん。この風を利用しましょう」

「……なるほど。わかりました」

風を送るのをやめようと思ってたけど、これを利用すればいいんだ。

「キヨカ、微妙に作戦変更。このまま蟲(ベステート)をあれにぶつけるぞ」

キヨカは、上空の風の球を見る。

「……本気？」

「本気も本気。その方がいいだろ」

「そうかもしれないけど、それって本当に大丈夫？」

「さあな」

「さあなって……」

「でも、やってみる価値はあると思うけどな」

「それはそうだけど……」

「だろ？ だったら実行だ。それに、討論してる暇も、検討してる暇もない。やるぞ」

「……しょうがないな……。わかったよ、頑張ってる」

「任せろって」

強引だけど話は纏まった。

「ヒナゲシさん、そのままお願いします」

「了解しました」

ヒナゲシさんには、そのまま熱を送り続けてもらう。

蟲(ベステート)は俺たちの方へ向かってくる。

その鎌を振り上げ狙っている。

(やってやる)

これが最後になるだろう。最後にするんだ。

タイミングを誤るな。ちゃんと蟲(ベステート)の動きを見るんだ。距離を間違えなよ……。

自分に強く言い聞かせる。

これを外すと、もうチャンスはなくなる。

熱せられた空気が、上に上に向かっていく。

この上昇気流を巧く操るんだ。

蟲(ベステート)が徐々に近付いてくる。

もう少し、もう少しこっちだ。

まだだ。まだだ。焦るな。

「京極さん」

「はい」

今だっ！

抑えていた力を一気に解放する。

熱せられた風が一気に天に向かっていく。

蟲(ベステート)はその上昇気流に巻き込まれて、一緒に上空に突き上げられる。

「よしっ」

ここまでは順調だ。

あとは、キヨカが思いついた通りになれば……。

空を見上げると、今まで熱し続けていた空気が、ようやく思い通りの状態になっている。

「トールちゃん、すごいね」

「ああ、すごいな……」

「あれは、黒雲ですか」

上空には、黒い雲が浮かんでいる。

最初はもくもくとした立ち雲だったのが、追加された熱風と水分で、こうして雷雲へと変化していた。

俺の風で巻き上げられた蟲(ベステート)は、その雲へと一直線だ。

「よしっ」

そうして、もう一度のタイミング。

「トールちゃん」

「おうよ」

キヨカが見計らってくれたタイミングで、俺はずっと制御していた力を解除する。それは、あの最初に打ち上げた風の球だ。それを解放する。

それと同時に、蟲(ベステート)が雷雲に突っ込んだ。

ゴロゴロという音が響く。

あの雲の中では、気流が大変な事になっているはずだ。

暖められた空気と、冷えきっている上空の空気。それらがぶつかると――

雲がピカリと光る。

そして、その閃光は大地にも向かってくる。

ただ、ここは高いものがないので、避雷針になるようなものがない。

一番危険なのは、俺たちが持っている刀だろう。もちろん、力を解除したと同時に鞘に収めている。

それでも、落雷の心配がないわけじゃない。むしろ危険なままだろう。

「伏せて」

キヨカの声を合図に、反射的に俺たちは雪の上に伏せる。冷たいけど、文句を言っている状況じゃない。感電死するのに比べたら、こんなものは我慢できるってもんだ。

雷はどこかに落ちたらしい。稲妻ってのを初めて見たかもしれない。

それとほぼ同じくして、なにか巨大なものも落下してきた。

確認するまでもない。

さっきまで戦っていた蟲(ベステート)だ。

「トールちゃん」

「キヨカ」

「京極さん、遠野(とおの)さん」

俺たちの目の前には、黒焦げになった蟲(ベステート)が横たわっていた。さすがの外殻も、雷は防げなかったようだ。

「キヨカ、蜘蛛(アラネーオ)を」

「うん」

キヨカは、左手の白いオープンフィンガーグローブを外して、蜘蛛(アラネーオ)を呼び出す。

この環境だと戦闘は難しいが、やはり封印は蜘蛛(アラネーオ)にしかできない。

「お願いね、アーちゃん」

「頼んだぜ、蜘蛛(アラネーオ)」

了承した、

冷たい雪の上に立った蜘蛛(アラネーオ)は、黒焦げになっている蟲(ベステート)を、糸でぐるぐる巻きにしていく。

すぐに全身を糸で覆った蜘蛛(アラネーオ)は、それを補食し始めた。

俺たちは、疲れきっていた。

その行為が終わるまで、雪の上にべたりと座り込んでいた。

やがて補食が終わり、封印が完了すると、キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を戻す。

「お疲れさま。ありがとうね、アーちゃん」

キヨカは左手を撫で、オープンフィンガーグローブをはめる。

「終わったね、トールちゃん」

「そうだな」

まだまだ序盤だが、とりあえずまた一体の蟲(ベステート)を封印する事ができた。

「あとどのくらいだっけ？」

「えっとね……」

キヨカはしばらく考えて、

「あと一かな」

「まだそんなにあるのか……」

そんな俺たちの会話に、ヒナゲシさんは驚いているようだった。

「お二人とも、あと一で終了なのですか」

「えっと……。トールちゃん」

この反応に、キヨカも戸惑っているようだ。

「あの……俺たち、まだ始まったばかりですよ」

「えっ？」

ヒナゲシさんは、俺の言葉が信じられないらしい。

「お訊ねしますが、お二人が封印すべき蟲(ベステート)は……」

「全部で一六ですよ。この旅に出てからは、まだ三体目だよね」

「ああ、そう……だな」

逢稀(あき)で偶然というか、まぐれで二体。そして、旅に出てから三体。まだ三分の一くらいだ。

「あの……ヒナゲシさんたちって、もっと多いんですか？」

「ええ。全部で六九体ですよ」

「「……………」」

なんだってえっ！

あまりの事に、俺たちは言葉を失った。

俺たちが封印しないといけない蟲(ベステート)は、かなりの数だと思っていたけど、ヒナゲシさんたちは俺たちの四倍以上の蟲(ベステート)を封印しないといけないらしい。

いったい、どのくらいの時間が必要になるんだろう。いや、何年掛かるんだ？

ヒナゲシさんたちでも、数年は掛かるだろう。

そして、俺たちだったら……うわ、計算するだけでもうんざりする。

「すごいですね……」

ちなみに、ヒナゲシさんたちは、あの丸くなる蟲(ベステート)で一〇体目だったらしい。俺たちの場合だと、そろそろ終わりが見えてくる数だ。だけど、ヒナゲシさんたちにすれば、まだまだ序盤だ。

「そうだ。狼(ルーポ)と龍堂(りゅうどう)は」

そうだった。傷ついた狼(ルーポ)が心配だ。無事だろうか。門番(ポーディスト)がいなくなったりしたら、この先蟲(ベステート)の封印はできなくなる。つまり、この旅の意味がなくなると同時に、使命は失敗で終わってしまう。

こんなにすごい人たちが、俺たちのために、俺たちに協力したために……。

「トールちゃん、それはちょっと驕りだよ」

キヨカは俺の考えを読んだみたいだ。そんなにわかりやすかったか。

「……………すまん」

「私に言うような事じゃないよ」

「すまん」

俺たちはリュウドウさんと狼(ルーポ)がいる場所に急ぐ。俺たちが戦っていた場所からは離れていたから、影響はなかったはずだ。それでも、狼(ルーポ)の状態を考えれば、楽観視は一切できない。

**(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

リュウドウさんと狼(ルーポ)がいるはずの場所には、リュウドウさんしかいなかった。

「龍堂、狼(ルーポ)は？」

ヒナゲシさんが鬼気迫るように訊く。

「なんとか無事です。ただ、しばらくは動けないでしょう」

「そう……よかった」

ヒナゲシさんは、その場にヘナヘナと崩れる。緊張の糸が切れたようだ。

「ねえ、アーちゃん、同じ門番(ポーディスト)同士でなんとかできないのかな？」

なるほど。確かに同じ門番(ポーディスト)同士ならなんとかできるかもしれない。

「それは困難 だが回復の助力は可能、

「アーちゃん、そういうのができるなら、先に伝えてよね」

「狼(ルーポ)の命の危機は僅少だった、

「それでも、全然なかったわけじゃないんだから、ちゃんと助けようよ」

「以降 考慮する、

「わかればいいよ。……というわけで、なんとかしてあげて」

「受諾、

とにかく、蜘蛛(アラネーオ)が狼(ルーポ)を助ける事ができるわけか。

「そういう事なので、リュウドウさん、ルーちゃんを出して下さい」

「はい、恐れ入ります」

キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を、リュウドウさんは狼(ルーポ)を呼び出す。

呼び出された狼(ルーポ)は、誰が見ても痛々しい状況だ。とてもじゃないが、無事とは言えない

。

「アーちゃん、助けてあげて」

「了承、

蜘蛛(アラネーオ)はそう答えると、狼(ルーポ)を糸でぐるぐる巻きにしていく。

ヒナゲシさんとリュウドウさんは、心配そうに狼(ルーポ)を見続けていた。

俺たちも狼(ルーポ)が心配だ。だけど、俺たちじゃどうする事もできない。ここは、同じ門番(ポーディスト)である蜘蛛(アラネーオ)に頼るしかない。

ヒナゲシさんとリュウドウさんは、神に祈るように手を合わせる。俺たちも、なんとか助かって欲しいと祈る。俺たちにできるのは、それくらいのものだった。

狼(ルーポ)をぐるぐる巻きにした蜘蛛(アラネーオ)の糸は、灰かに明滅している。なんだか、力を分け与えているようにも見える。まさにそうしているんだろう。

それがどのくらい続いたんだろうか、糸の明滅が終わった。

「可能な事は全て行った 後は自ら回復するだろう しばらく糸はそのままに、

「蜘蛛(アラネーオ)殿、感謝致します」

リュウドウさんは、今にも泣きそうな顔で、深々と頭を下げる。

「ありがとう。本当にありがとう」

ヒナゲシさんは涙を浮かべていた。

「しばらくは行動不能 回復すれば自ら伝えるであろう、

「アーちゃん、ありがとう」

「蜘蛛(アラネーオ)、本当にありがとうな」

「礼は不要 我は我が行くべきと判断したまで、

「それでもありがとうだよ」

本当だ。そりゃ、もっと早く教えてくれてもよかったけど、戦闘中だったしな。それは無理ってもんだろうし、それで蜘蛛(アラネーオ)を責められるものじゃない。こうして、狼(ルーポ)の治療をしてくれたわけだし、感謝しかない。

「ヒナゲシさん、リュウドウさん、俺たちのために協力して下さいまして。狼(ルーポ)もありがとう」

ヒナゲシさんとリュウドウさんに頭を下げる。そして、狼(ルーポ)にも。

「私からも。ヒナゲシさんとリュウドウさん、それにルーちゃんがいなかったら、今頃どうなっていたか……。蟲(ベステート)もそうですけど、この世界に最初に来た時だって。それに、トールちゃんの修行まで……。本当にありがとうございました」

「そういや、俺の修行まで面倒をみてもらったんだ。最初も助けてもらったし。ホントに助けてもらってばかりだった。この世界での全ての面倒をみてもらったんだよな。」

「お礼なんて不要よ。あたしたちも、蟲(ベステート)の退治と封印を手伝ってもらったわ。同じ四護(しご)で同じ使命をもつ者同士、協力するのは当然です」

「雛罌粟(ひなげし)様の仰る通りでございます。我々こそ狼(ルーポ)の治療をしていただき、感謝の念でいっぱいです」

「でも、それは俺たちの……」

「それは違うわ」

ヒナゲシさんが俺の言葉を遮る。

「これはあたしたちの戦いでもあるの。さっきも言ったけど、これは四護としての使命。時代は関係ないわ」

「……ありがとうございます」

これ以上はなにも言えない。

もしこれから先、俺たちが旅をしている間に、別の同じ使命を果たそうとしている四護がいたら、俺たちは無条件で協力するだろう。それは、今回の事があって、そう考えるようになった。今回の事がなければ、俺たちのような旅をしている人が、他にもいるなんて想像もしてなかったからな。

「この世界の人たちは、どうなるのかな」

キヨカのその呟きに、みんながハツとなる。

この世界の蟲(ベステート)は封印した。だから、この雪は消えていくだろう。元々はこの地域にはなかったものだ。気候が元に戻れば、自然と溶けるはずだ。

「徐々に元の環境に戻るはずよ。ただ、しばらくはこの異常な状況が続くでしょうし、なにかしらの影響は残るでしょうね」

「.....そうですか」

キヨカは肩を落とす。

確かに、蟲(ベステート)がいなくなればすぐに平和に元通りなんて、そんな風にはならないだろう。ましてや、なにもなかった事になんてなるはずもない。どうやっても、リセットなんてできないんだ。

それぞれの世界に影響を与えてるわけだから、その元凶がなくなっても影響は続くだろう。

着ぐるみに見えるとか、その程度なら支障はなさそうだが、この世界のように環境大きく変えてしまったら.....。

それを考えると、俺たちが封印するのを急がないと、ますます被害と影響は広がってくわけか。

「頑張ろうね、トールちゃん」

「そうだな。だけど、あんまり抱え込みすぎるなよ」

「トールちゃんこそ、だよ」

「そうだな」

それぞれに言い合っても、またこういう事があれば、すぐに抱え込んでしまうだろう。そればかりはどうしようもない。それが俺たちなんだろうから。

「やっぱり、ヒナゲシさんたちも、色々とかこういう事を経験してきたんですか？」

「こういう事？」

「その世界の人たちが、苦しめられているというか.....」

どう言えばいいのかわからないのだろうか。まあ、言葉にしづらいのかもな。

「そうね。それは少なからずあるわね。でも、あたしたちの世界だって、決してそういう事がなかったわけではないわ。全ての悪は蟲(ベステート)のせいだとされている」

「針聞書がそうだもんね。あれって.....そっか、それでそんな数なんだ」

キヨカがなにか一人で呟きながら、勝手に納得している。なんなんだ？

こいつって、妙な知識を持ってたりするからな.....。享徳の乱なんか、知りもしなかったよ。でも、これをきっかけに覚えたけどな。変な語呂合わせと一緒に。

「だから、特別な力を持つあたしたちが、蟲(ベステート)を退治する旅をしているわけ。その行為によって、あたしたちの世界が救われるのなら、あたしたちはその使命を全うするだけよ」

「すごいね.....トールちゃん」

「そうだな」

俺たちにそんな覚悟がもてるだろうか。

俺たちが旅をしているのは、俺たちが蟲(ベステート)を解放してしまったからだ。それがなければ、俺たちは蟲(ベステート)の存在を知る事なんてなかったし、そもそも自分たちが特別な力を持った一族だなんて、知りもしなかっただろう。

それを考えれば、貴重な経験なんだろうし、学校では学べない事をしているんだろうけど...

...やっぱり、留年は勘弁して欲しい。締まらないかもしれないけど、実際問題としてそこは重要だろう。

「さあ、これでこの世界での役目もおしまいね」

それを聞いて、俺たちは改めてそれを感じた。

そう——俺たちも、そしてヒナゲシさんたちも、この世界ですべき事を終えた事になる。

そして、次の世界へ向かわなければならない。

それは、俺たちの別れも同じだ。できれば、ヒナゲシさんたちと一緒に旅ができれば、どれだけ心強いかわからない。だけど、それができない事はわかっている。できるはずがない。

それぞれに向かうべき世界が違うのだ。もしかしたら、どこかで再会する事ができるかもしれない。だけど、それは世界や時間の数からすれば、ほぼないに等しい確率だろう。

「ヒナゲシさん、リュウドウさん、大変お世話になりました。色々とお面倒をお掛けして申し訳ありませんでした」

今言っておかないと、言う機会なんてもうないかもしれない。

「トールちゃん、一人で勝手にずるいよ。私も.....お世話になりました」

二人して頭を下げる。

「お二人とも、頭を上げて。あたしたちが協力するのは、当然の事ですし、面倒だとは思っていませんよ。一緒に過ごせて、あたしたちこそ楽しかったです」

「雛罌粟様の仰る通りでございます。我々の旅の中でこれほど安らげた事はありませんでした。やはり、同じ使命をお持ちの、四護であるという事が、まるで故郷にいるかのような安らぎを与えてくださいました」

なんだか、畏まって言われると、烏滸がましいというか.....。余計に申し訳ない気分になる。

やっぱり、色々日常生活の世話から、四刀の修行まで色々してもらった。

だけど、ここでそれを申し出れば、それこそ押し問答のようになってしまうだろう。

俺がそういう事を言い出すと思ってるのか、キヨカがちらちらとこっちを見ている。

言わねえよ。

しばらく黙っていると、ようやく安心したのか、真っ直ぐヒナゲシさんたちを見る。

「それでは、そろそろ出発しましょうか」

「はい」

やがて、ヒナゲシさんとリュウドウさんは、櫓から俺たちの荷物を下ろし始める。もちろん雪の上なので、そのままだと沈んでしまう。なので、板を用意してその上に置いていく。

慌てて、俺たちは自分たちの荷物を下ろしていく。

「二人とも元気でね」

「お元気で」

「ヒナゲシさんとリュウドウさんも.....」

「あの.....お二人は、どうやって移動するんですか？」

俺たちが別れの挨拶をしているのに、キヨカはそんな事を訊く。

「おい、そんなの.....あっ」

そうだ。櫓を引くにしても、狼(ルーポ)は今動ける状態じゃない。

「そうね。櫓は人力になるわね。そうして、どこかにあるはずの『時の口』を探すわ。……………  
そういえば、あなたたちも同じよね。だったら、それまで一緒に移動しましょうか」

ヒナゲシさんも名残惜しいのだろうか。勝手だがそう思いたい。

「あの……それなんですけど……」

キヨカは言いづらそうに口ごもる。なかなか珍しい。

「どうかされましたか？」

「その『時の口』なんですけど……」

なにを言おうと……………あつ。そうか。キヨカ的能力って……。

「あたしの能力は、『時の口』を作る能力なんです。だから、ここに作る事ができるんです」

そう言うと同時に、キヨカは目の前に『時の口』を作ってみせる。

「これは……」

「まさか……」

ヒナゲシさんとリュウドウさんは、信じられないものを見たという顔だ。

なるほど、確かにレアスキルだったんだよな。

この旅において、移動手段である『時の口』を自由に作れば、いつでも移動できる。どこにあるかもわからない『時の口』を探さなくていいわけだ。

「素晴らしい能力ね。まさか、そんな能力があるなんて……」

「稀少な能力でございますね。そして、この旅に於いて、これほど重宝いたす能力もありますまい」

「トールちゃん、なんだかすごいリアクションだよ」

思わぬ賞賛にキヨカは戸惑いを隠せずにいる。

「そうだろうよ。お前の能力は、かなりのレアスキルなんだぞ」

「それでもさ……」

顔を真っ赤にして、戸惑っているキヨカを見ているのは楽しかった。

「ヒナゲシさん、リュウドウさん、これを使って下さい」

もしかすると、一緒に『時の口』を探した方がよかったのかもしれないと、今になって思い始める。だってそうだろう。その方が、まだ一緒にいれるじゃないか。もうしばらく、別れを惜しむ事だって、他にも色々と役に立つような事を聞いたかもしれないじゃないか。

だけど――

疲れた状態での移動を強いる事になるのは、やっぱり心苦しい。元々そのつもりだったとしても、俺たちはそうする必要がないとわかっている。それを隠してまで、そうする必要はないはずだ。

だったら、やっぱりこれでよかったんだ。

少しだけ別れが早まっただけだ。

それは、お互いにとってというよりも、お互いの世界にとってはいい事なんだろう。なにせ、早く蟲(ベステート)を封印する必要があるわけだから。

だから、俺たちの気持ちは、ぐっと抑えなきゃいけないんだ。

「ありがとう」

「感謝致します」

ヒナゲシさんとリュウドウさんは、何度も何度も礼を言って、その中に入っていった。

「.....行っちゃったね」

「.....ああ、そうだな」

残された俺たちは、ぼんやりと目の前のそれを見ている。

「ちょっとは、恩返しできたのかな」

「どうだろうな。ほんのちょっとくらいは、できたんじゃないかな」

「.....そうだよね」

「じゃあ、俺たちも行くか」

「そうだね。次へ行こう」

最後に、過去の四護と一緒に過ごした、この雪原を心に刻む。

**(C)2013 STUDIO SAIX All Rights Reserved.**

心の歌を奏でて 一四護邂逅一 ㊦

<http://p.booklog.jp/book/48950>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48950>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48950>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ